

河内長野市埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ

上原北遺跡

昭栄町東遺跡

清水遺跡

大日寺遺跡

天野山金剛寺遺跡

2001年3月

河内長野市教育委員会

序 文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向う街道の要衝として発展してきた街です。この為市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も大阪市内への通勤圏に位置しているため住宅都市として近年、開発の波が押し寄せて来ています。この開発がもたらす文化財や自然に対する影響も大きいものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

この様な状況の中で、遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、更には未来の市民へ伝えていく事は、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市に於いては、重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達のメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成13年3月

河内長野市教育委員会
教育長 福田弘行

例 言

1. 本報告書は平成12年度文部科学省の国庫補助事業ほか、河内長野市教育委員会が実施した遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、本市教育委員会教育部社会教育課主幹兼文化財保護係長尾谷雅彦・同係員鳥羽正剛・太田宏明を担当者として実施した。
3. 調査及び本書の執筆は尾谷、鳥羽、太田が行った。編集は松尾和代がこれを補佐した。文責は各文末に記している。
4. 遺構の写真撮影は鳥羽、太田、中西和子(河内長野市立ふれあい考古館長)が行い、遺物の写真撮影は中西が行った。
5. 発掘調査及び内業整理については、下記の方々の参加を得た。(敬称略)
岩立二郎、喜多順子、杉本祐子、高田政則、田川富子、田坂忍、田坪政雄、中村幸子、長崎輝男、姫島幸男、榎本裕子、松尾和代、牟田口京子、山下稔、友利晴美
6. 発掘調査については下記の方々の協力を得た。記して感謝する。(敬称略)
池田武(鳥取県大栄町教育委員会)、大塚美幸、嘉悦真紀子、北居晃三、小森光、斎田菜穂子、辻宏子、中尾智行(大阪府文化財調査研究センター)、中林一郎、中村嘉彦、林和宏、東原美佳、藤井美佐子、藤田徹也(ふれあい考古館)、林本和美、株式会社島田組、株式会社アート、株式会社夏原技研、写測エンジニアリング株式会社、株式会社オーワフ、ショベル工業㈱
7. 本調査については、写真・実測図等の記録及びカラースライドを作成した。また、出土遺物については市教育委員会で保管し、一部は市立ふれあい考古館で展示している。広く一般の方々に利用されることを希望するものである。

凡 例

1. 本報告書に掲載されている標高はTPを基準としている。
2. 土色については、「新版標準土色帖」1990年度版による。
3. 平面測量基準は国家座標第VI系による5mメッシュを基に実施したものである。
4. 図中の北は座標北である。
5. 遺構実測図の縮尺率は1/30・1/40・1/60・1/80・1/100・1/120・1/140・1/300とした。
6. 本書の遺構名は下記の略記号を用いた。
S B……掘立柱建物 S D……溝 S E……井戸 S F……道
S G……鶴溝 S K……土坑 S P……ピット S Y……窯 S Z……堤
N V……落ち込み
7. 遺物名は、土師質土器を土師質、瓦質土器を瓦質、須恵質土器を須恵質と略称し、器種名を付した。
8. 瓦器塼の編年は尾上史氏の「和泉型瓦器塼の編年」、中世遺物は鈴柄俊夫氏の編年を用いた。なお、器種名については、当市の標記によるものとする。
9. 遺物実測図の縮尺率は、土器1/4、石器2/3、鉄製品1/3を基準に各遺物の状況により、縮尺は変えている。
10. 須恵器・瓦器・瓦質土器・陶磁器の断面は黒塗り、弥生土器・土師器・土師質土器・石器の断面は白抜き、鉄製品の断面は斜線である。
11. 遺物番号と写真図版の番号とは一致する。

目 次

序文

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

図版目次

第1章 調査の状況	1
第2章 調査の結果	5
第1節 上原北遺跡(UHN00-1)	(太田) 5
1 概略	5
2 遺構と遺物	5
3 まとめ	14
第2節 上原北遺跡(UHN00-1)における考古地磁気年代推定	15
1 考古地磁気年代推定の基礎	15
2 試料の採取と測定	17
3 残留磁化測定結果	19
4 推定年代	23
5 引用文献	24
第3節 上原北遺跡(UHN93-1)	(尾谷) 25
1 概略	25
2 遺構と遺物	25
3 まとめ	41
第4節 昭栄町東遺跡(SEE99-1)	(鳥羽) 47
1 概略	47
2 遺構と遺物	47
3 まとめ	50
第5節 清水遺跡(SMZ00-1)	(鳥羽) 51
1 概略	51
2 遺構と遺物	51
3 まとめ	52
第6節 大日寺遺跡(DNT00-4)	(太田) 53

1	概略	53
2	遺構と遺物	53
3	まとめ	57
第7節	天野山金剛寺遺跡(K G T 00-1)	(鳥羽) 58
1	概略	58
2	遺構と遺物	58
3	まとめ	59

挿 図 目 次

第1図	河内長野市遺跡分布図	3
	上原北遺跡(U H N 00-1)	
第2図	調査区位置図(1/5000)	5
第3図	S B 1 遺構実測図(1/60)	5
第4図	遺構配置図(1/150)	6
第5図	S B 1 出土遺物実測図	7
第6図	S D 4 出土遺物実測図	7
第7図	S K 1・2 出土遺物実測図	8
第8図	S Y 1 遺構実測図(1/30)	9
第9図	S K 2 遺構実測図(1/60)	11・12
第10図	S Y 2 遺構実測図(1/30)	13
第11図	S Y 3 遺構実測図(1/30)	13
第12図	S Y 4 遺構実測図(1/30)	13
第13図	S Y 5 遺構実測図(1/30)	13
第14図	包含層出土遺物実測図	14
第15図	広岡(1977)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた 過去2000年間の地磁気永年変化曲線	16
第16図	中島・谷崎(1990)により3タイプに分類された消磁ベクトル図	16
第17図	バイロット・サンプルについての消磁ベクトル図	21
第18図	各試料の消磁前と消磁後の残留磁化方向	22
第19図	広岡(1977)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた 過去2000年間の地磁気永年変化曲線(黒丸は平均磁化方向、 梢円は誤差角 α_{\pm} の範囲を示す)	23

上原北遺跡(U H N98-1)

第20図	調査区位置図(1/5000)	25
第21図	S B 1 遺構実測図(1/100)	26
第22図	S B 1・3・5～7 出土遺物実測図	26
第23図	S B 2 遺構実測図(1/100)	27
第24図	S B 3 遺構実測図(1/100)	28
第25図	S B 4 遺構実測図(1/100)	29
第26図	S B 5 遺構実測図(1/100)	29
第27図	S B 6 遺構実測図(1/100)	30
第28図	S B 7 遺構実測図(1/100)	31
第29図	S D 2 遺構断面実測図(1/40)	31
第30図	S D 1・2 出土遺物実測図	32
第31図	S E 1 出土遺物実測図	32
第32図	S E 1 遺構断面実測図(1/40)	32
第33図	S K 1～3 出土遺物実測図	33
第34図	S K 4 遺構実測図(1/30)及び出土遺物実測図	34
第35図	S K 6 遺構断面実測図(1/40)	35
第36図	S K 7 遺構実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1)	36
第37図	S K 7 出土遺物実測図(2)	37
第38図	S K 8～10 出土遺物実測図	38
第39図	S K 11 遺構断面実測図(1/40)	38
第40図	S K 12 遺構断面実測図(1/40)	39
第41図	S K 12 出土遺物実測図	39
第42図	S K 13～15 出土遺物実測図	40
第43図	S P 1～5 出土遺物実測図	41
第44図	包含層出土遺物実測図	43
第45図	S B 1～7 配置模式図(1/500)	44
第46図	遺構配置図(1/300)	45・46

昭栄町東遺跡(S E E99-1)

第47図	調査区位置図(1/5000)	47
第48図	遺構配置図(1/140)	48
第49図	S Z 1 に伴う溝の全体図(1/100)	49
第50図	S Z 1 に伴う溝の立面図(1/60)	49
第51図	N V 1 出土遺物実測図	49
第52図	包含層出土遺物実測図	50

清水遺跡(S M Z 00-1)

第53図 調査区位置図(1/5000)	51
第54図 遺構配置図(1/80)	51
第55図 包含層出土遺物実測図	52
大日寺遺跡(D N T 00-4)	
第56図 調査区位置図(1/5000)	53
第57図 遺構配置図(1/120)	54
第58図 S D 1 遺構断面実測図(1/40)	54
第59図 S D 1・2 出土遺物実測図	55
第60図 S G 2 出土遺物実測図	55
第61図 S K 1~3 出土遺物実測図	56
第62図 S K 1 遺構断面実測図(1/40)	56
第63図 包含層出土遺物実測図	57

天野山金剛寺遺跡(K G T 00-1)

第64図 調査区位置図(1/5000)	58
第65図 第1調査区遺構配置図(1/60)	58
第66図 第2調査区遺構配置図(1/60)	59
第67図 S F 1 出土遺物実測図	59
第68図 第2調査区包含層出土遺物実測図	59

表 目 次

第1表 発掘届出件数月別一覧表	1
第2表 主な発掘調査一覧表	1・2
第3表 河内長野市遺跡地名表	4
第4表 热残留磁気測定結果	20
第5表 考古地磁気測定結果(平均磁化方向)	21
第6表 考古地磁気年代推定年代	24

図 版 目 次

- 図版1 U H N 00-1 調査区全景(南から)、S K 2
 図版2 U H N 00-1 S B 1・S D 1(北から)、S K 1 遺物出土状況
 図版3 U H N 00-1 S Y 1、S Y 3
 図版4 U H N 93-1 調査区全景(上から)

- 図版5 U H N93-1 調査区全景(西から)、調査区全景(東から)
- 図版6 U H N93-1 調査区全景(西から)、S E 1(西から)
- 図版7 U H N93-1 S K 4(東から)、S K 7(西から)
- 図版8 S E 99-1 調査区全景(南東から)、調査区全景(北から)
- 図版9 S M Z00-1 調査区全景(東から)
D N T 00-4 調査区全景(北から)
- 図版10 D N T 00-4 S D 1
K G T 00-1 第2調査区全景(北から)
- 図版11 U H N00-1 S B 1(1・2)、S D 4(4~7・9・11~21)、S K 1(22・23)、
S K 2(28)
- 図版12 U H N00-1 S K 1(25・26・30・32・34)、S K 2(24・29・31・33・35・36)、
包含層(37~40)
U H N93-1 S B 1(44)、S B 5(45)、S B 7(47)、S D 1(48)、S E 1(50・
51・54・56)
- 図版13 U H N93-1 S K 3(60・63)、S K 4(67・69~75・78・80)、S K 7(86)
- 図版14 U H N93-1 S K 3(64)、S K 7(82・87・88~91・93・94・96~99)、S K 10
(100・101)
- 図版15 U H N93-1 S K 15(121~124・126)、S P 1(133)、S P 3(127~129)、
S P 5(131・132)、包含層(142・146・148・150)
S E E 99-1 N V 1(159)
- 図版16 S M Z00-1 包含層(165~169)
D N T 00-4 S D 1(170・171)、S D 2(172・173)、S K 1(177・178・181~
183・185・186・189・190)、S K 2(184・188)、S K 3(179・
180・187)、包含層(192~197)
K G T 00-1 S F 1(198)、包含層(199・200)

第1章 調査の状況

平成12年の文化財保護法57条の2および3の発掘届及び発掘通知の件数は、総数162件、そのうち発掘届145件、発掘通知17件である。また、今年も新しい遺跡が発見され、新規発見届及び通知は4件提出されている。

今年の発掘届にみられる原因者の状況は、大規模な開発よりも個人住宅の新築及び改築が大部分を占めている。

第1表 発掘届出件数月別一覧表(平成12年1月～12月)

	平成11年度			平成12年度										総計
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
発掘届(57条の2)	9	14	13	11	8	21	9	12	16	7	14	11	145	
発掘通知(57条の3)	2		1	1	1	3	3	3		1		2	17	
発見届(57条の5)								1					1	
発見通知(57条の6)				1						1	1		3	

第2表 主な発掘調査一覧表(平成12年1月～12月)

遺跡名	調査期間	申請者	申請面積	用途	種別	区分	備考
高向遺跡	H12.1.11	個人	94.47	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
上原遺跡	H12.1.17	(株)けんめい	276.17	店舗	調査	原因者	遺構・遺物なし
沢の井城跡	H12.1.19	河内長野市	180.00	クリーンセンター	立会	原因者	遺構・遺物なし
昭栄町東遺跡	H12.2.1 ～2.29	河内長野市	5,849.00	商行為文化施設	調査	原因者	本書掲載
高向遺跡	H12.2.7	個人	309.99	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
西高野街道	H12.2.16	個人	103.72	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
高野街道	H12.2.21	河内長野市	1,800.00	駅前再開発	調査	原因者	遺構・遺物なし
向野遺跡	H12.2.28	個人	109.28	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
市町東遺跡	H12.2.23	個人	454.77	専用住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
喜多町遺跡	H12.3.16 ～3.34	個人	104.99	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
喜多町遺跡	H12.3.16 ～3.34	(株)山口住宅	797.95	分譲住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
三日市遺跡	H12.3.23	個人	111.55	専用住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
東高野街道	H12.3.30	富田林十木事務所	780.00	道路	立会	原因者	遺構・遺物なし
市町西遺跡	H12.4.6	(有)大阪土地建物	100.63	分譲住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
加賀田神社遺跡	H12.4.10 ～4.28	(宗)加賀田神社	1,758.09	神社	調査	原因者	遺構・遺物なし
東高野街道	H12.4.10	個人	256.31	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
清水遺跡	H12.4.11 ～4.14	個人	117.29	専用住宅	調査	国庫	本書掲載
喜多町遺跡	H12.4.27	個人	110.16	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
朝所漢代古跡	H12.4.28	(社福)長野社会福祉事業団	902.75	保育園	調査	原因者	遺構・遺物なし

遺跡名	調査期間	申請者	申請面積	用途	種別	区分	備考
加瀬遺跡	H12.5.16	(株)ティーアイ コ・ボーラーション	1,790.73	分譲住宅	調査	原因者	中世の瓦質土器が出土
喜多町遺跡	H12.5.16	個人	220.09	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
西高野街道	H12.5.22	個人	407.44	分譲住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
上原北遺跡	H12.5.22 ~6.16	個人	2,084.93	店舗	調査	原因者	本書掲載
大日寺遺跡	H12.5.23	河内長野市	241.93	集会所	調査	原因者	建物跡・井戸を検出。瓦が出土。
宋町遺跡	H12.6.7	個人	174.16	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
沢の宮町南遺跡	H12.6.7	個人	190.29	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
一日市遺跡	H12.6.15 ~6.26	個人	517.54	専用住宅	調査	国庫	中世の土塹・ピットを検出
塙谷遺跡	H12.6.21	個人	100.84	専用住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
勝浦蒲代官所跡	H12.7.13 ~7.14	個人	63.35	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
向野遺跡	H12.7.28	個人	80.22	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
塙谷遺跡	H12.8.2	国立大阪府病院	2,797.48	病院	調査	原因者	遺構・遺物なし
沢の宮町南遺跡	H12.8.3	個人	84.21	専用住宅	調査	原因者	土器器・須恵器・十輪賀十器 が出土。
塙谷遺跡	H12.8.4	個人	100.90	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
大日寺遺跡	H12.8.11 ~8.31	ショベル工業(株)	40.00	下水道	調査	原因者	中世の柱穴を検出し。瓦質・土 器質土器が出土。
大日寺遺跡	H12.8.18 ~9.25	ショベル工業(株)	332.27	駐車場	調査	原因者	本書掲載
高野街道	H12.8.21	個人	227.71	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
塙谷遺跡	H12.8.24	個人	132.71	専用住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
人野山金剛寺遺跡	H12.8.28 ~9.1	個人	197.25	専用住宅	調査	国庫	本書掲載
二日市遺跡	H12.9.18	個人	232.38	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
千代山神社跡	H12.9.18	個人	359.65	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
小塙遺跡	H12.9.19	個人	210.00	分譲住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
小塙遺跡	H12.9.19	個人	140.00	分譲住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
塙谷遺跡	H12.9.26	個人	426.89	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
高向遺跡	H12.9.27	個人	311.30	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
勝浦蒲代官所跡	H12.10.17 ~10.18	個人	421.86	専用住宅	調査	国庫	遺構・遺物なし
宋町南遺跡	H12.11.2	個人	267.73	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
三日市遺跡	H12.11.6	個人	109.00	専用住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
宋町遺跡	H12.11.9	個人	100.65	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
宋町遺跡	H12.11.9	個人	112.77	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
塙谷遺跡	H12.11.16	国立大阪府病院	7,530.00	駐車場	立会	原因者	遺構・遺物なし
三日市北遺跡	H12.11.17	個人	482.86	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
塙谷遺跡	H12.12.1	個人	104.81	専用住宅	立会	原因者	遺構・遺物なし
一日市北遺跡	H12.12.1	個人	182.92	専用住宅	調査	原因者	遺構・遺物なし
一日市北遺跡	H12.12.15	河内長野市	1,600.00	道路	調査	原因者	調査中



第1図 河内長野市遺跡分布図(1/40000)

番号	文化財名稱	種類	時代	番号	文化財名稱	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降	(73)	葛城第15經塚	經塚	平安以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降	(74)	葛城第19經塚	經塚	平安以降
3	觀心寺遺跡	社寺	平安以前	(75)	笠原尾	城館	中世
4	大師山古墳	古墳	古墳(後期)	(76)	大沢	城館	中世
5	大師山南古墳	古墳?	古墳(後期)	(77)	三國山経塚	經塚	平安以降
6	大師山道跡	集落・生産	弥生(後期)・平安	(78)	光鹿寺遺跡	社寺	中世以降
7	奥津寺遺跡	社寺	中世以降	(79)	荒子城跡	城館	中世
8	鳥居子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降	(80)	蟹井瀬神社遺跡	社寺	中世以降
9	啄穴古墳	古墳	古墳(後期)・近世	(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
10	長瀬城跡	生産	平安～近世	(82)	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良	(83)	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安・近世
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良	(84)	吉野町遺跡	散布地	中世
13	延命寺等遺跡	社寺	平安以降	(85)	吉野原北遺跡	無落	中世
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降	(86)	大日寺遺跡	社寺・古墳(墳蓋)	弥生・中世
15	日野觀音寺遺跡	社寺・生産	平安・中世	(87)	高向南遺跡	散布地	縄文
16	麻原寺遺跡	社寺	中世以降	(88)	小塙遺跡	集落	古墳・奈良
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降	(89)	庵塙遺跡	集落	古墳
18	五ノ木古墳	古墳	古墳(後期)	(90)	尾崎遺跡	集落	古墳・中世
19	向南遺跡	集落	臼石器・中世	(91)	ジョノマエ遺跡	城館?	中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世	(92)	仁王山城跡	城館	中世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世	(93)	タコラ城跡	城館	中世
22	高帽子形古墳	古墳	古墳(後期)	(94)	越立城跡	城館	中世
23	木広廻寺跡	生産	中世	(95)	上原近世瓦窯	生産	近世
24	鶴谷遺跡	散布地	縄文～近世	(96)	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
25	渡谷八幡神社	社寺	平安以降	(97)	上田町窯跡	生産	近世
26	蟹井瀬北遺跡	散布地	中世	(98)	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
27	蟹井瀬北遺跡	散布地	中世	(99)	西之山町遺跡	散布地	中世
28	天見駿北万方遺跡	散布地	中世	(100)	野間里遺跡	無落	平安
29	平口阿南遺跡	社寺	中世	(101)	鳴尾遺跡	散布地	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降	(102)	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
31	清水遺跡	散布地	中世	(103)	上原中道遺跡	散布地	古墳・中世
32	「作並崩」古墳	古墳?	古墳	(104)	小野塚遺跡	墳墓	中世
(33)	笠村地藏堂跡	社寺	近世	(105)	葛城第17經塚	經塚	平安以降
(34)	浦畠埋埴塚	埴塚	近世	(106)	篠原堂跡	社寺	中世以降
(35)	中村阿苏陀堂跡	社寺	近世	(107)	野持作遺跡	生産	中世
(36)	東の村農會堂跡	社寺	近世	(108)	寺元遺跡	集落・社寺	奈良・中世
(37)	西の村農會堂跡	社寺	近世	(109)	葛原遺跡	散布地	中世
38	清水阿弥院堂跡	社寺	近世	(110)	法螺摩古墳跡	古墳	古墳
39	庵原房跡	集落	古墳	(111)	山上千草山古墳跡	古墳	古墳
(40)	宮の下内蔵塚	墳墓	古墳	(112)	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
41	宮山古墳	古墳	古墳	(113)	地塙寺跡	社寺	近世
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良	(114)	宮の下遺跡	集落	平安～中世
43	西代蒲原屋跡	跡	跡	(115)	篠町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
44	上原町墓地	墓地	近世	(116)	鍋町遺跡	散布地	縄文・中世
45	總持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉	(117)	人井井遺跡	散布地	弥生・中世
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世	(118)	鶴町北遺跡	集落	縄文・中世
47	寺ヶ森遺跡	散布地	縄文	(119)	市町西遺跡	集落	縄文・中世
48	ト原遺跡	散布地	臼石器～近世	(120)	米町南遺跡	集落	中世
49	佐古神社遺跡	社寺	近世以降	(121)	采木町東遺跡	散布地	弥生・中世
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降	(122)	橋町東遺跡	散布地	弥生
51	青原古墳寺遺跡	社寺	中世以降	(123)	沙の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
52	所澤代官所跡	城館	江戸	(124)	沙の宮町遺跡	散布地	中世
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳	(125)	神方丘近世墓地	墳墓	近世
54	愛子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世	(126)	地蔵院	寺社	中世以降
55	愛子寺城跡	城館	中世	(127)	三昧院遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
56	三日市遺跡	集落・古墳地	臼石器～近世	(128)	松林寺遺跡	社寺	近世以降
57	日の谷城跡	城館	城館	(129)	朝栄町遺跡	散布地	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文	*130	東高野街道	街道	平安以降
59	沙の山城跡	城館	中世	*131	西高野街道	街道	平安以降
60	峰山城跡	城館	中世	*132	高野街道	街道	平安以降
61	鶴萬山城跡	城館	中世	133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
62	國見城跡	城館	中世	134	地蔵寺東方遺跡	墳墓	縄文
63	廣成城跡	城館	中世	135	本多町北遺跡	散布地	中世
64	櫛見城跡	城館	中世	136	下原町遺跡	散布地	古墳・中世
65	天神社遺跡	社寺	中世以降	137	あかし白台遺跡	散布地	近世
(66)	葛城第15經塚	經塚	平安以降	138	岩瀬北遺跡	集落	中世
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降	139	計測近世墓地	墳墓	近世
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降	140	昭栄町東遺跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
69	石仏城跡	城館	中世	141	三日市北遺跡	集落	弥生～中世
70	佐近城跡	城館	中世	142	三日市宿跡	宿場に伴う街並	中世～近世
71	旗尾城跡	城館	中世	143	上田町宿跡	宿場に伴う街並	中世～近世
72	葛城第16經塚	經塚	平安以降				

() は地図範囲外 * は街道につき地図上にプロットせず

第3表 河内長野市遺跡地名表

第2章 調査の結果

第1節 上原北遺跡(UHN00-1)

1 概略

当該調査地はUHN93-1調査地の南に隣接している。平成12年、上原町871番地1他に店舗が建設されることとなり、河内長野市教育委員会は範囲確認調査を実施した。その結果、遺構、遺物を確認し、原因者と協議した結果、記録保存することとなった。調査面積は約400m²である。調査は平成12年5月22日から6月16日まで実施した。

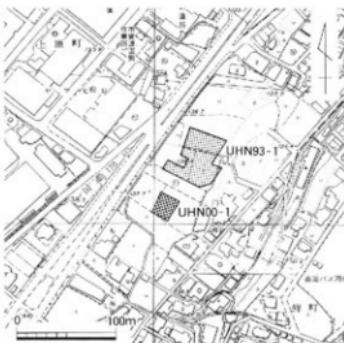
2 遺構と遺物

当該調査地から、中世の掘立柱建物、溝、鋤溝、土坑、窯を検出した。基本層序は4層であり、上層から耕土(2.5Y3/2黒褐色細砂)、床土(10YR8/8黄色粘土)、遺物包含層(2.5Y8/6黄色粘土 マンガンを多く含む)、地山(2.5Y8/6黄色粘土)となる。遺構は地山面で検出した。

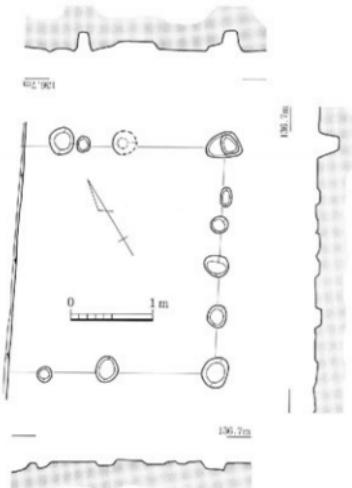
(1) 掘立柱建物

〔SB1〕(第3・5図、図版2・11)

調査区東部で検出した。南半部のみ検出し、北半部は調査区外へ続くものと考えられる。柵と重複するが、規模は検出した範囲で、桁行2間(1.99m)以上×梁行2間(2.8m)、柱間は桁行1.3m、梁行1.3mを測る。柱の掘形



第2図 調査区位置図(1/5000)



第3図 SB1 遺構実測図(1/60)

は円形で掘形径は0.3mである。桁行方向はN-33°-Eに偏する。

柱穴に伴う遺物は土師質皿(1)、瓦器塊(2・3)が図化できた。

S B 1 の時期は13世紀末~14世紀初と考えられる。

(2) 溝

〔SD 1〕(図版2)

調査区中央部をN-61.5°-Wに偏しながら東西方向に走る素掘溝である。規模は幅1.23m、深さ0.03mで、長さ13.8mにわたり検出した。



第4図 遺構配置図(1/150)

遺物は黒色土器、土師質土器、瓦器塊、瓦質土器、陶磁器が出土したが、細片のため図化できなかった。

〔S D 2〕

調査区東部をN-43°-Eに偏しながら南北方向に走る素掘溝である。規模は幅0.6m、深さ0.12mで、長さ7.41mにわたり検出した。

遺物はサヌカイトの剝片が出土した。

〔S D 3〕

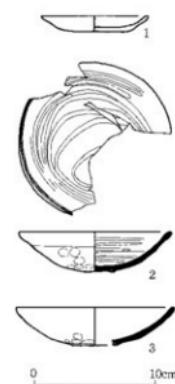
調査区東部をN-44°-Eに偏しながら南北方向に走る素掘溝である。規模は幅1.83m、深さ0.05mで、長さ10.44mにわたり検出した。

遺物は土師質土器、瓦器塊が出土したが、細片のため図化できなかった。

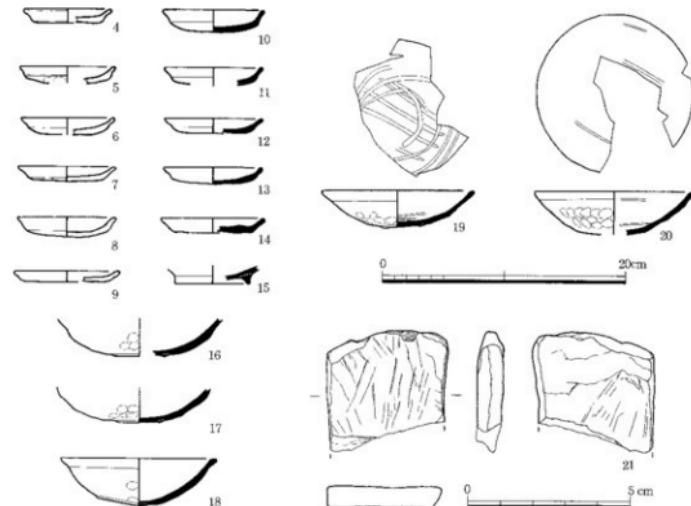
〔S D 4〕(第6図、図版11)

調査区西北部をN-26.5°-Eに偏しながら南北方向に走る素掘溝である。北から南へ行くほど幅が狭まるが、南端では再び広がり土坑状になる。規模は幅0.3~1m、深さ0.03mで、長さ12.36mにわたり検出した。

遺物は土師質皿(4~9)、瓦器皿(10~14)・塊(15~20)、砥石(21)が図化できた。



第5図 S B 1出土遺物
実測図



第6図 S D 4出土遺物実測図

S D 4 の時期は、14世紀初頭と考えられる。

[S D 5]

調査区北西部をN-24°-Eに偏しながら南北方向に走る素掘溝である。規模は幅0.3m、深さ0.04mで、長さ2.98mにわたり検出した。

遺物は瓦器塊が出土したが、細片のため図化できなかった。

(3) 鋤溝

[S G 1]

調査区北部に位置する。鋤溝は長さ18.72m、幅2.32mにわたって、3~4条を検出した。深さは0.01~0.05mであった。

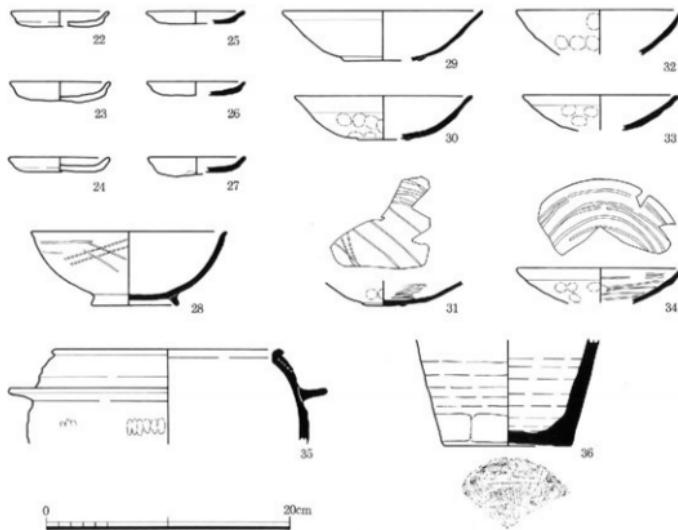
遺物は土師質土器、瓦器塊が出土したが、細片のため図化できなかった。

(4) 土坑

[S K 1] (第7・9図、図版2・11・12)

調査区西部で検出した。平面形は歪な方形を呈する。規模は長径3.28m、短径1.36m、深さ0.41mであった。

遺物は土師質皿(22・23)、瓦器皿(25~27)・塊(30・32・34)が図化できた。瓦器塊は尾



第7図 S K 1 · 2出土遺物実測図

上編年のIII-3型式に相当するものであり、土師質皿は8cm前後で、瓦器皿は口径が7.8~7.9cmを中心とする。

S K 1の時期は、13世紀末葉から14世紀初頭と考えられる。

[S K 2] (第7図、図版11・12)

調査区南西部で検出した。平面形は歪な橢円形を呈する。規模は長径7.86m、短径5.49m、深さ0.35mであった。S K 2の内部には5基の窓が構築されていた。

遺物は土師質皿(24)、瓦器塊(28・29・31・33)、瓦質土釜(35)、備前壺(36)が出土した。瓦器塊は先行するものを含むが、概ね尾上編年のIII-2~III-3型式を中心としており、瓦質土釜は鋤柄分類の1群である。土師質皿は口径が8.6~9cmを中心としている。

S K 2の時期は、13世紀後半と考えられる。

(5) 窓

[S Y 1] (第8図、図版3)

S Y 1はS K 2内の南に位置する。平面形は逆三角形を呈し、煙道と搔き出し口がこれに接続している。規模は最大幅1.01m、長さ1.65mであった。煙道部は奥壁の中央に位置する。煙道部の規模は幅0.16m、長さ0.58mであった。搔き出し口は幅0.3m長さ、0.39mであった。S Y 2、S Y 3を破壊して構築しており、検出できた窓5基のなかでは最も新しい段階に築造されたものと考えられる。

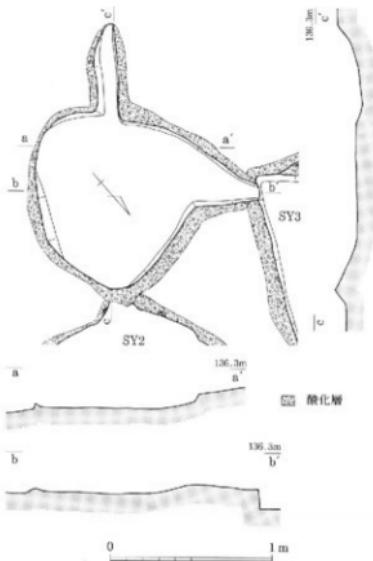
[S Y 2] (第10図)

S Y 2はS Y 1の東に隣接する。平面形は逆三角形を呈し、煙道と搔き出し口がこれに接続している。S Y 1により煙道部は破壊されていた。規模は最大幅0.78m、長さ1.06mであった。

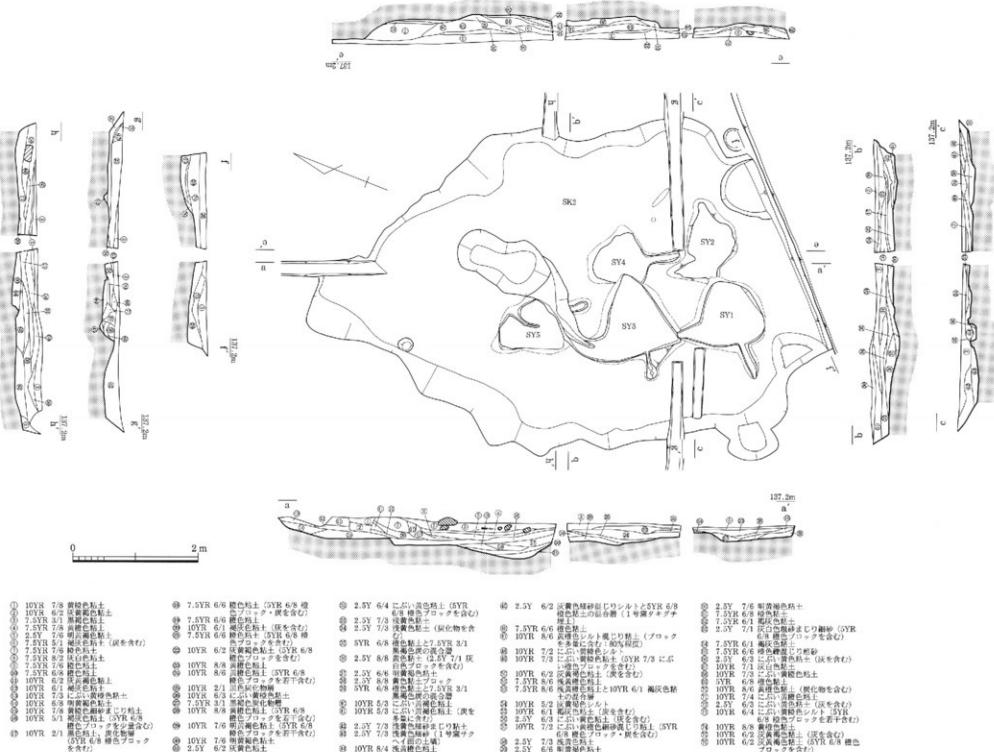
搔き出し口は幅0.25m、長さ0.36mであった。

[S Y 3] (第11図、図版3)

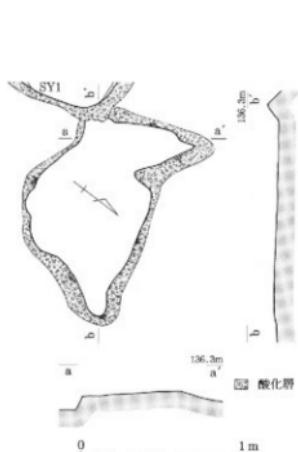
S Y 3はS Y 2の北に隣接する。平面形は逆三角形を呈し、煙道と搔き出し口がこれに接続している。規模は最大幅1.0m、長さ1.29mであった。煙道部は奥壁の中央に位置する。煙道部の規模は幅0.07m、長さ0.43mであった。搔き出し口は幅0.38m、長さ0.6m



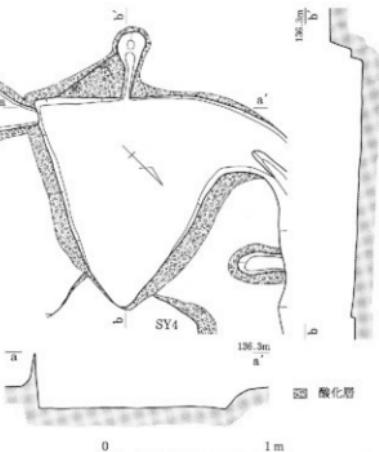
第8図 S Y 1遺構実測図(1/30)



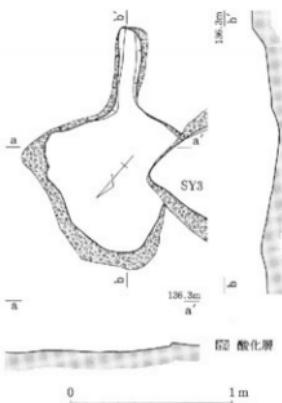
第9図 SK2 遺構実測図(1/60)



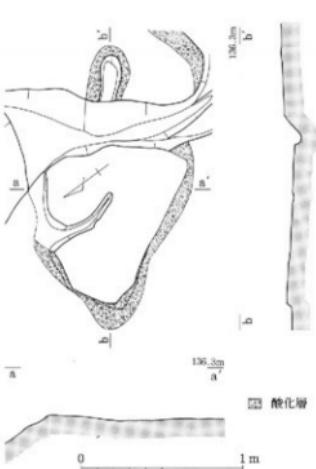
第10図 SY 2 遺構実測図(1/30)



第11図 SY 3 遺構実測図(1/30)



第12図 SY 4 遺構実測図(1/30)



第13図 SY 5 遺構実測図(1/30)

以上あった。SY 5 を破壊して構築しており、SY 1 によって南側の壁体が一部が破壊されていた。

[SY 4] (Figure 12)

SY 4 は SY 3 の東に位置する。平面形は逆三角形を呈し、煙道と掻き出し口がこれに接続している。規模は最大幅0.82m、長さ0.86mであった。煙道部は奥壁の中央に位置す

上原北遺跡

る。煙道部の規模は幅0.08m、長さ0.53mであった。掻き出し口はSY3によって破壊されていた。

[SY5] (第13図)

SY5はSY3の北に隣接する。平面形は逆三角形を呈し、煙道と掻き出し口がこれに接続している。規模は最大幅0.88m、長さ1.01mであった。煙道部は奥壁の中央に位置する。煙道部の規模は幅0.08m、長さ0.53mであった。SY3によって掻き出し口が破壊されていた。

(5) 包含層

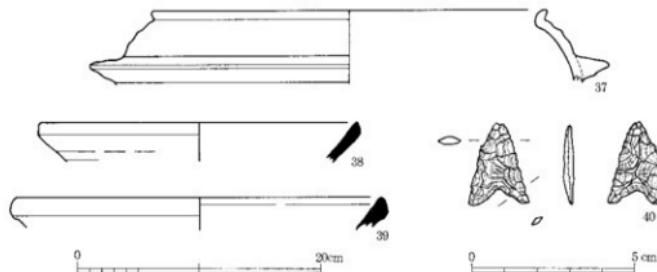
包含層からの出土遺物は石鍔(40)、土師質土釜(37)、東播系須恵質練鉢(38・39)が図化できた。(第14図、図版12)

3まとめ

上原北遺跡では、1993年度の調査及び今回の調査で、中世の集落を構成する遺構群を検出した。調査で得られた情報に基づくと、上原北遺跡は14世紀～15世紀にかけて存続した集落遺跡であり、掘立柱建物、溝、井戸等で構成されていた。また集落には木炭窯が伴っていた。木炭窯の存在は集落の生業を考える上で貴重である。市内の中世集落では、向野遺跡や野作遺跡で鍛冶関連の遺構、遺物を検出しており、中世集落が農耕以外の生業をもっていたことが知られていた。本次調査でも、それを証明することができた。

また、当該遺跡の西0.7kmに位置する小山田丘陵では古代～近世にいたる木炭窯が多数検出されている。

太田



第14図 包含層出土遺物実測図

第2節 上原北遺跡における考古地磁気年代推定

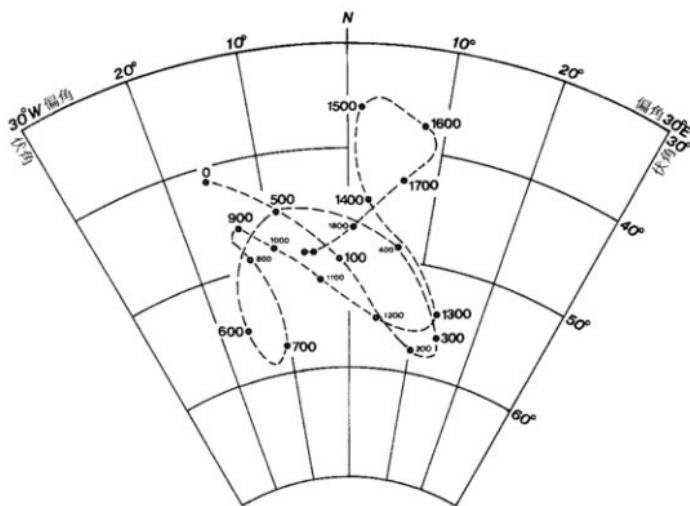
上原北遺跡で発掘調査された木炭窯から、考古地磁気年代推定用の試料を採取した。

1 考古地磁気年代推定の基礎

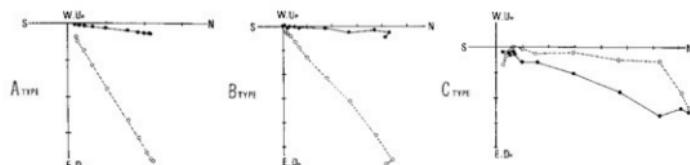
磁石は北を指す。地球には地磁気が存在するためである。地磁気はベクトル量であり、ある地点における地磁気を記述するために、方向(偏角と伏角)と大きさ(全磁力)が必要である。一般に、磁気コンパスの磁針が指す北(磁北)は、真北(地図の経線方向)からはずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面の下になるよう傾く。この傾斜角が伏角である。河内長野市の現在の偏角は約6.7°Wで、伏角は約48°である。また、全磁力は、約0.45エルステッドである。これら地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気分布は、地球の中心に棒磁石を置いたときにできる磁場の分布に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約11.5度傾いている。この磁軸と地表との交点が地磁気北(南)極である。

地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけではなく、大きさ(全磁力)も変化する。この変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼土の残留磁化の測定を基礎とする考古地磁気測定によって明らかにことができる。どんな物質でも、ある(強)磁場中に置かれると磁化を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは磁化が消える。しかし、強磁性物質(磁石になれる物質)では、外部磁場が消えても磁化が残る。これが残留磁化である。残留磁化の強さや安定性は、磁化を獲得する時の条件によって異なる。残留磁化はその獲得方法の違いによっていろいろな名前で呼ばれる。考古地磁気学で地磁気の化石として最もよく利用するのが熱残留磁化である。岩石には小量の強磁性粒子(赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の酸化物)が含まれている。火成岩では、高温のマグマの状態から冷えて岩石になる過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によって磁化を帯び、冷えてからはその残留磁化を保持し続ける。これが熱残留磁化である。土も焼かれると、冷却の過程で同様の熱残留磁化を獲得する。熱残留磁化の性質を簡単にまとめると、次のようになる。岩石の誕生時または上が焼かれた時の地磁気方向を記録していて、その大きさは地磁気の大きさに比例し、何億年もの長い期間でも変質しない。これらの性質によって、地磁気の化石として利用が可能なのである。Hirooka(1971)により遺跡の焼土の熱残留磁化測定から求められた過去2000年間の西南日本における偏角・伏角の変化を第15図に示す。偏角は20°Wから15°E、



第15図 広岡(1977)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気永年変化曲線



第16図 中島・谷崎(1990)により3タイプに分類された消磁ベクトル図

伏角は35°から60°の間で変化している。第15図のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁化を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、¹⁴C法やフィッシャン・トラック法のような放射(絶対)年代測定法とは異なり、それだけで独立して年代を決定できない。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から2つか3つの候補年代が出てくる。そのうちの何れを採用するかは、考古学的推定に頼ることになる。

従来、考古地磁気年代推定では、二次磁化を除去するための消磁実験は行われていなかった。考古地磁気試料として用いられる焼土は、焼成温度がキューリー温度以上の高温に達していれば、その熱残磁化は非常に安定なものであると考えられること。さらに、せいぜい2000年前までの歴史時代のものを測定の対象としているため、二次磁化の主成分であ

る粘性残留磁化(VRM)は少量しか付いていないと推定されたためである。しかし、近年、測定機器の性能の飛躍的な向上により測定精度が高くなり、わずかな二次磁化の影響も識別できるようになってきた。そこで、中島・谷崎(1990)は、考古地磁気試料について段階交流消磁実験を実施して、考古地磁気試料にも消磁実験が必要であることを明らかにし、A, B, C 3つのタイプに分類している。第16図に A, B, C の消磁ベクトル図(Zijderveld, 1967)を示す。同図の黒丸は水平成分、白丸は鉛直成分を表わしている。A タイプは方向変化がなく、原点に向かう直線上にプロットできる 1 つの成分(一次磁化)しか存在しない試料である。B タイプは方向変化があり、一次磁化と二次磁化の 2 成分が存在し、二次磁化が消えた(消磁)後に原点に向かう直線(一次磁化成分)が得られる試料である。C タイプは、原点に向かう直線が引けず、安定な磁化成分が得られない試料であるとしている。

本報告でもパイロット・サンプルを選び段階交流消磁を行い、その結果より最適消磁磁场を求める。全試料について最適消磁磁场強度で交流消磁を実施し、推定を行った。

2 試料の採取と測定

(1) 試料採取方法

遺構の焼土から次の様な手順で試料を採取する。

- ① 焼土面に先の尖ったハンマーで、1辺が数cm程度の立方体試料を取り出すための溝を、試料が床面から外れないように、手で押さえながら丁寧に掘る。
- ② 溝を掘り終わった後、掘り込み作業中に試料表面についた砂や石を刷毛で丹念に取り除く。
- ③ 薄く溶いた石膏をビニール袋に入れ、試料全体にかけて表面を補強する。
- ④ 乾燥後、やや固めの石膏を試料上面にかけ、1辺 5 cm の正方形のアルミ板をすばやく押しつける。石膏が固まるのを待ち、アルミ板を外す。
- ⑤ アルミ板を用いて作った平面の最大傾斜の方位と傾斜角を、考古地磁気用磁気コンパス(Hirooka, 1971)で測定し、平面上に方位測定位置を示すマーク(平面を定義する 3 つの点)と試料番号を記入する。
- ⑥ ハンマーで試料を掘り起こし、試料の底面を石膏で補強し、新聞紙等に包み持ち帰る。

(2) 試料整形方法

遺構で採取した試料はそのままでは測定できないので、試料整形を以下のように行う。

- ① 試料を 1 辺 3.5 cm の立方体に切断するために、プラスチックの型板(34×34 mm の正方形)を利用し枠取りの線を引く。この時、型板のマークと試料表面の方位測定位置を示すマーク(3 点)を合わせる。
- ② 試料温度が上がるのを防ぐために冷却水をかけながら、ダイヤモンド・カッターで 1 面ずつ切断する。切断面が崩れないように石膏で補強し、次の面の切断を行う前に試

料を充分乾燥させる。この作業を5回繰り返すと立方体試料が得られる。

- ③ 試料表面についた余分な石膏をカッターで削り落とす。

(3) 残留磁化測定方法

残留磁化は、当社製のリング・コア型スピナー磁力計(SMD-88型)を用いて測定した。交流消磁実験には二軸回転方式の当社製DEM-8601-2型を使用した。この装置は、三層の円筒アルミニウムによって外部磁場(地磁気)は10mT(ミリテスラ)以下にシールドされている。以下に今回実施した残留磁化測定と交流消磁の方法について述べる。

- ① 採取した全試料について、自然残留磁化(NRM)測定を行う。
- ② NRM測定結果をみて、段階交流消磁実験を行うパイロット・サンプルを1個選ぶ。
- ③ パイロット・サンプルを5, 10, 15, 20, 30, 40, 50, 60mTの各磁場で順に消磁し、その都度、残留磁化を測定する。各消磁段階の測定結果を消磁ベクトル図に表し、同図の直線上にのる最適消磁強度を決定する。
- ④ 残りの試料を全て最適消磁強度で消磁し、その残留磁化を測定する。そして、その平均値(パイロット・サンプルのデータを含む)を、考古地磁気データとして採用する。

(4) データ整理

測定結果として得られるデータは、試料に設定した座標に対するものなので、試料を遺構のものとの位置に戻した時の真北を基準方向とする座標に対するものに変換しなければならない。そのためには、試料が残留磁気を獲得した時の位置(地理的緯度、経度)、および方位(試料の一つの基準面の走向、傾斜)が必要である。位置については、1/25,000程度の縮尺の地形図から、その遺構の緯度、経度を読み取ればいい。方位は、試料採取の作業で磁気コンパスを使って測定している。磁気コンパスの方位は、磁北に対するものなので、真北に対する方位に直すために、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができる。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの遺構から8~10個程度の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で得られた偏角(Di), 伏角(Ii)から平均値(Dm, Im)を求める。ここで用いる統計学的方法はFisherによって確立されたものである。各試料の測定値を、方向(Di, Ii)の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、n組の(Di, Ii)より

$$N = \sum \cos I_i \cdot \cos D_i \quad (\text{北向きの成分})$$

$$E = \sum \cos I_i \cdot \sin D_i \quad (\text{東向きの成分})$$

$$Z = \sum \sin I_i \quad (\text{鉛直の成分})$$

Dm, Imは、

$$R = (Z^2 + N^2 + E^2)^{1/2}$$

$$Dm = \tan^{-1} E/N$$

$I_m = \sin^{-1} Z/R$ で与えられる。

このとき、信頼度係数 k は、

$k = (n^{-1}) / (n^{-k})$ となる。 k が大きいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数百の値になる。

誤差角 α_{\pm} は、危険率 5 % として

$\alpha_{\pm} = \cos^{-1} [1 - (n - R) / R \{ (1 / 0.05) 1 / (n - 1) - 1 \}]$ で与えられる。 α_{\pm} が小さいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数度以内になる。

これより Dm , I_m のそれぞれの誤差の幅として、

$$\delta D = \alpha_{\pm} / \cos I_m \quad (\text{偏角誤差})$$

$$\delta I = \alpha_{\pm} \quad (\text{伏角誤差})$$

が求められる。

以上のようにして得られた計算結果を、一つの遺構を代表する考古地磁気データとしている。

なお、考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原(1981)に詳しく解説されている。

3 残留磁化測定結果

発掘調査された上原北遺跡の 2 ケ所の木炭窯より 20 個の考古地磁気用の定方位試料を採取し、その熱残留磁気を測定した。熱残留磁気測定結果を第 4 表と第 5 表にまとめた。現在の地磁気偏角の補正は、国土地理院の 1990 年の磁気偏角図から読取った 6.7°W を使用した。

磁化の安定性を確かめるために行った各遺構のバイロット・サンプルの段階交流消磁の測定結果を第 17 図に示す。同図の黒丸は水平成分、白丸は鉛直成分を表している。S(南), N(北), E(東), W(西) は水平成分の方向、Up(上向き), Dn(下向き) は鉛直の方向である。白丸の横に記した数字は交流消磁の強度で、単位は mT(ミリテスラ) である。この図で、丸印の間をむすんだ直線がその消磁段階で消された磁化ベクトルとなる。磁化の各成分は図上では直線上に並ぶ点の列で表される。特に考古地磁気試料のような単純な受熱を持った試料では問題とする初期磁化は原点に向う直線として表される。

第 17 図を見ると、5 ~ 10 mT で二次磁化成分が無くなり、原点に向かう直線となっている。

段階消磁の結果より最適消磁強度を 15 mT と判断して、残りの試料すべてを 15 mT で消磁を行った。

第 4 表は、個々の試料の熱残留磁気測定結果 (D_i , I_i) である。第 18 図は消磁前と 15 mT での消磁後の磁化方向の等面積投影図である。

第5表に、消磁前と消磁後についての、磁気方向の平均値(Dm, Im), 誤差角(α_{se})と信頼度係数(k), および平均磁気強度を示した。試料数nは平均値(Dm, Im)を計算した試料数で、括弧内の数字は測定した全試料数である。

各試料のNRM(消磁前)の磁化強度は約 10^{-3} emuで、木炭窯の焼土としては標準的な磁化強度であった。

第4表 热残留磁気測定結果

(1) SY1

試料名	交流消磁前			交流消磁後 消磁強度 = 15 mT		
	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^2$ emu	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^2$ emu
KA-51	-4.4	53.9	1.49	-4.0	54.0	1.23
KA-52	-1.2	55.6	1.65	-4.5	53.9	1.30
KA-53	-0.1	54.3	0.95	-0.6	52.5	0.69
KA-54	-1.5	55.5	0.96	4.2	55.3	0.56
KA-55	-10.7	58.2	0.77	-3.8	55.9	0.51
KA-56	-3.6	55.3	2.18	-4.5	55.1	1.89
KA-57	2.9	55.4	1.30	1.8	54.0	1.07
KA-58	-0.7	55.8	1.30	-1.8	52.3	0.96
KA-59	0.8	60.7	1.46	2.6	56.4	0.81
KA-60	-5.6	59.1	2.29	4.0	56.8	1.39

(2) SY5

試料名	交流消磁前			交流消磁後 消磁強度 = 15 mT		
	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^2$ emu	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^2$ emu
KA-61	-4.6	51.4	4.02	-4.7	48.5	2.06
KA-62	-6.9	48.3	4.55	-7.1	46.4	2.71
KA-63	-5.0	51.5	2.96	-7.4	49.4	1.35
KA-64	-6.2	51.7	1.23	-6.3	52.5	0.84
KA-65	-2.3	57.4	1.02	-3.2	56.2	0.71
KA-66	-2.1	53.9	1.24	-5.4	53.7	0.89
KA-67	-2.6	54.6	1.64	-3.9	53.1	1.18
KA-68	-6.9	55.0	0.42	-4.8	53.3	0.18
KA-69	-5.3	53.6	0.56	-6.5	50.9	0.38
KA-70	-2.7	53.6	1.05	-4.3	52.9	0.77

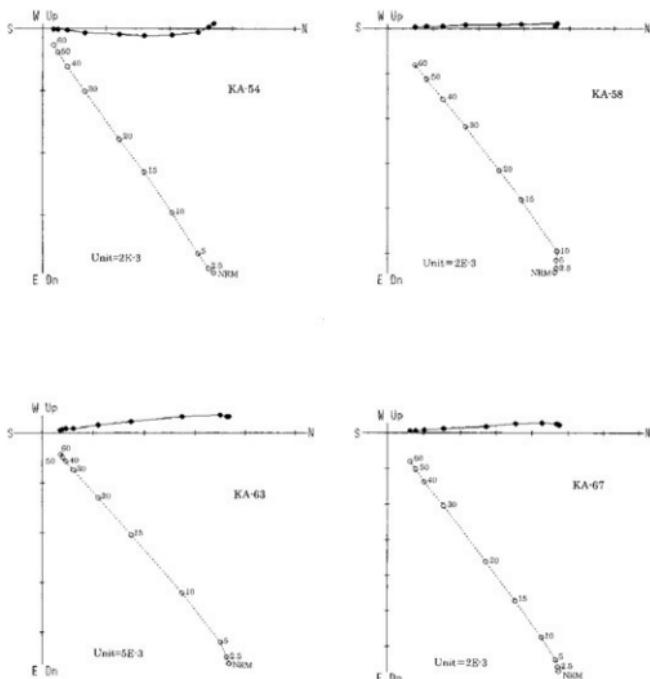
第5表 考古地磁気測定結果(平均磁化方向)

(1) 交流消磁前の測定結果

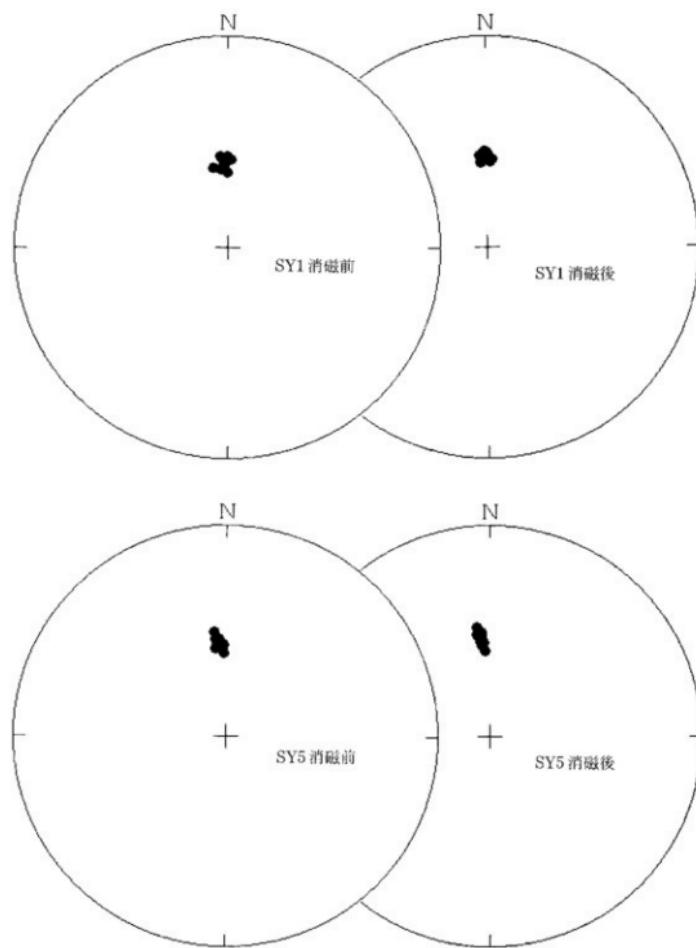
遺構名	試料数 n	Dm (° E)	Im (°)	α_{m} (°)	k	平均磁化強度 emu
SY1	10	-2.4	56.4	1.8	709.4	1.44×10^{-2}
SY5	10	-4.5	53.1	1.6	874.0	1.87×10^{-2}

(2) 交流消磁後の測定結果

遺構名	試料数 n	Dm (° E)	Im (°)	α_{m} (°)	k
SY1	10	-1.5	54.7	1.5	1107.1
SY5	10	-5.4	51.7	1.8	720.7



第17図 バイロット・サンプルについての消磁ベクトル図



第18図 各試料の消磁前と消磁後の残留磁化方向

今回の測定は、 α_m が小さく、kが大きい安定した磁化方向を持つ試料であり年代推定に適した測定結果であった。

4 推定年代

推定年代は、第15図の西南日本の地磁気永年変化曲線(広岡, 1977)と消磁後の偏角、伏角、誤差角と考古学的推定年代を比較して求めた。

第19図は相違低結果をプロットしたもので、黒丸は平均磁化方向を示し、それを囲む椭円の実線が誤差角 α_m の範囲である。

この範囲の中あるいはこれに一番近い曲線の部分が遺構の推定年代となる。

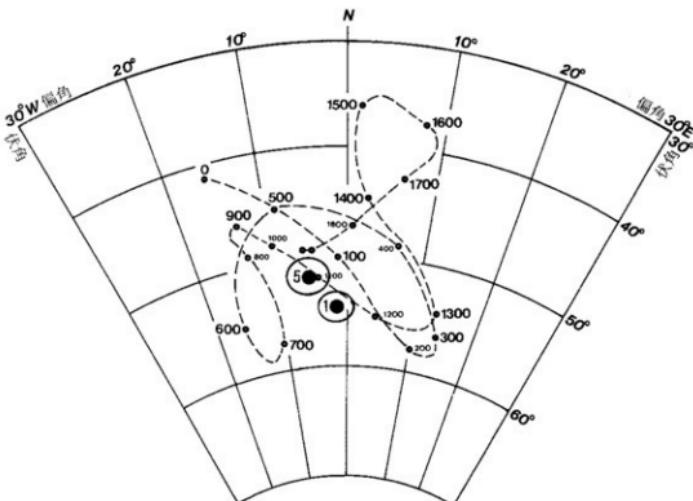
2つの木炭窯の測定結果は、11世紀、12世紀の永年変化曲線と良く一致している。考古学からの年代(考古学的推定年代)の10世紀から14世紀とも良く一致している。

S Y 1 は12世紀中頃の永年変化曲線に最も近く A.D. 1150年±25年となる。

少し永年変化曲線から外れるため±25年の年代幅とした。

S Y 2 は11世紀末の曲線上にあり A.D. 1100年±10年が得られる。

S Y 1 の年代が S Y 5 の年代より新しい年代となった。考古学からの推定年代も S Y 1 が新しい年代であるとの事から、年代差は別にして矛盾しない測定結果と考えられる。



第19図 広岡(1977)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気永年変化曲線(黒丸は平均磁化方向、椭円は誤差角 α_m の範囲を示す)

第6表 考古地磁気年代推定年代

遺構名	考古地磁気推定年代 (AD)
(1) SY1	1150年±25年
(2) SY5	1100年±10年

5 引用文献

- * Hirooka, K., 1971 : Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan. Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral, 38, 167-207.
- * 広岡公夫, 1977 : 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究, 15, 200-203.
- * 中島正志・夏原信義, 1980 : 考古地磁気年代推定法. 考古学ライブラリー9. ニュー・サイエンス社.
- * 中島正志・谷崎有里, 1990 : 考古地磁気試料の交流消磁実験. 福井大教育紀要.
- * Shibuya, H., 1980 : Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大基礎工修論, 54p.
- * Zijderveld, J. D. A., 1967 : A. C. demagnetization of rocks: analysis of results. In Methods in paleomagnetism, Collinson et al. (eds.), 254-295, Elsevier Pub. Com.

第7節 上原北遺跡(UHN93-1)

1 概略

上原北遺跡は、石川の左岸に広がる中位段丘上に位置する。標高は約133mである。

今回の調査は上原町895番地1他に商業施設が建設されることになり、当該地が周知の遺跡である上原北遺跡に該当するため、市教育委員会によって範囲確認調査が実施された。その結果、遺構、遺物が確認され、原因者と協議した結果、記録保存することとなった。調査は平成6年3月2日から平成6年4月14日まで実施した。



第20図 調査区位置図(1/5000)

2 遺構と遺物

当該遺跡が立地する中位段丘上は、石川側に近接するほど遺構の埋没深度は浅く、その為、堆積層序は表上層を入れても4層である。

遺構は掘立柱建物7棟、井戸1基、溝2条、土坑を検出した。

(1) 掘立柱建物

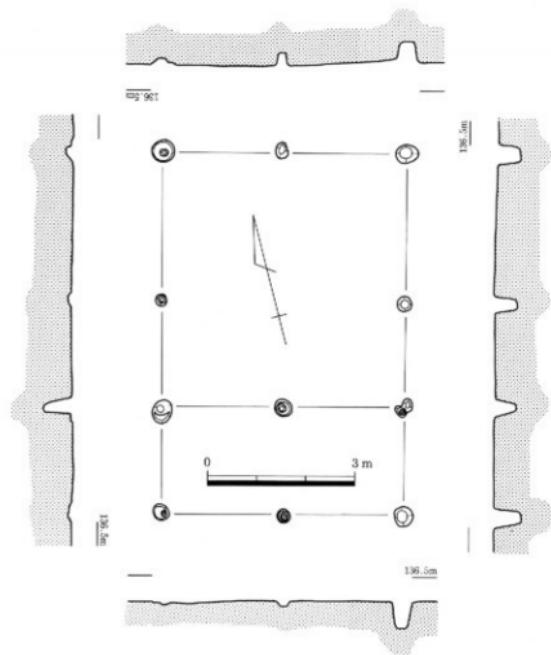
〔S B 1〕(第21・22図、図版12)

調査区の南側で検出した掘立柱建物である。規模は桁行3間(7.5m)×梁行2間(4.95m)で、柱間は桁行3.15m、梁行2.55mを測る。桁行方向はN-15°-Eに偏する。柱の掘形は円形で掘形径0.4m、柱穴も円形で柱穴径0.1m、深さ0.47mを測る。南側二列目梁行中央に柱穴を有する。このことにより建物は北側2間×2間と南側2間×1間の部分に機能的に分けることができる。

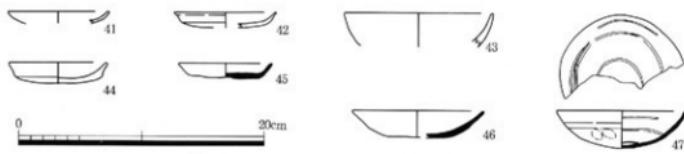
遺物は柱穴から土師質皿(44)が出土し、図示できた。

〔S B 2〕(第23図)

調査区の南側で検出した掘立柱建物でS B 1と重複する。規模は桁行5間(9.7m)×梁行2間(6.15m)で、柱間は桁行3.15m、梁行2.55mを測る。桁行方向はN-15°-Eに偏する。柱の掘形は円形で掘形径0.37m、柱穴は円形で柱穴径0.15m、深さ0.23mを測る。身舎東側の南から2間目までの外側1間(0.7m)が庇として張り出している。また、身舎



第21図 SB 1 遺構実測図(1/100)



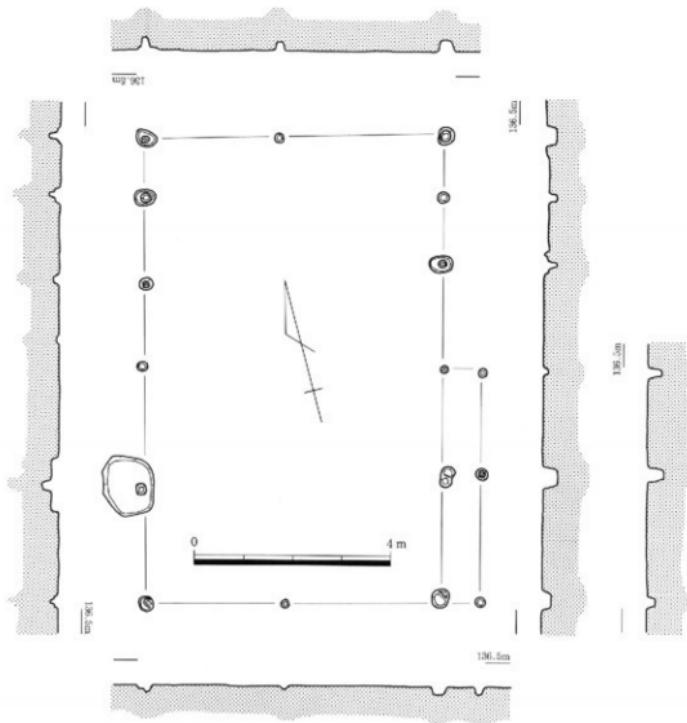
第22図 SB 1・3・5～7 出土遺物実測図

北側端の1間も庇になる可能性がある。

柱穴から遺物は出土しなかった。

[SB 3] (第22・24図)

調査区の南側で検出した掘立柱建物でSB 1・2の西側に接する。規模は桁行4間(11.25m)×梁行2間(9.4m)で、柱間は桁行4.2m、梁行4.4mを測る。桁行方向はN-12°-Eに偏する。柱の掘形は円形で掘形径0.3m、深さ0.13mを測り、柱穴径は不明である。桁行東側の南から2間目までの外側1間(0.7m)が庇として張り出している。この建物の復元は柱間が長く桁行が短くなる可能性がある。



第23図 S B 2 遺構実測図(1/100)

遺物は柱穴から土師質皿(43)が出土し、図示できた。

[S B 4] (第25図)

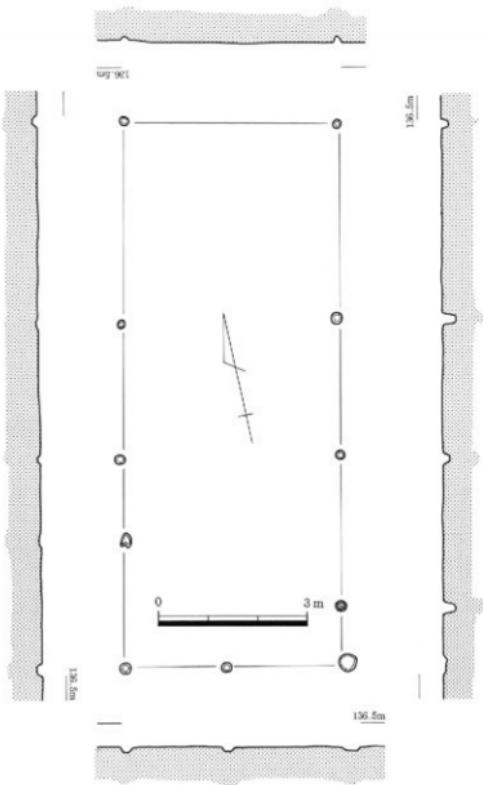
調査区の南側で検出した掘立柱建物でS K 7と重複し、S B 1・2の北側に接する。規模は桁行1間×梁行1間で、柱間は桁行3.85m、梁行2.65mを測る。桁行方向はN-9°-Eに偏する。柱の掘形は円形で掘形径0.3m、柱穴は円形で柱穴径0.15m、深さ0.21mを測る。

柱穴から遺物は出土しなかった。

[S B 5] (第22・26図、図版12)

調査区の北側で検出した掘立柱建物でS D 2と一部重複する。規模は桁行3間(7.8m)×梁行2間(5.1m)で、柱間は桁行3.25m、梁行2.75mを測る。桁行方向はN-25°-Eに偏する。柱の掘形は円形で掘形径0.4m、柱穴径0.2m、深さ0.24mを測る。

遺物は柱穴から瓦器皿(45)が出土し、図示できた。



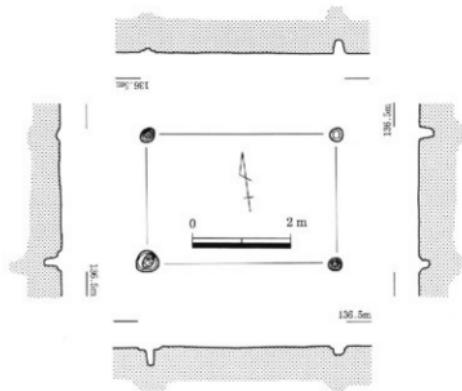
第24図 S B 3 造構実測図(1/100)

〔S B 6〕(第22・27図)

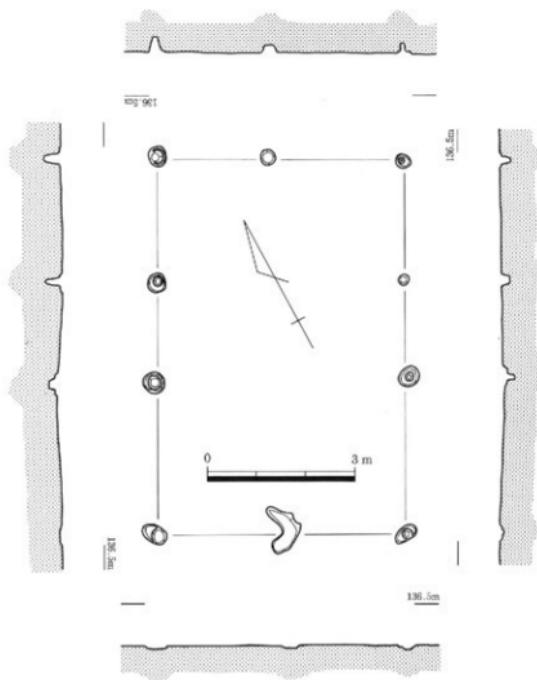
調査区の北側で検出した掘立柱建物でS B 7と重複する。規模は桁行3間(8.75m)×梁行2間(5.7m)で、柱間は桁行2.9m、梁行2.8mを測る。桁行方向はN-21°-Eに偏する。柱の掘形は円形で掘形径0.4m、柱穴径0.2m、深さ0.26mを測る。

建物の中央にも柱の掘形を検出したが、掘形径が0.2mと小さく間仕切り用の柱と考えられる。

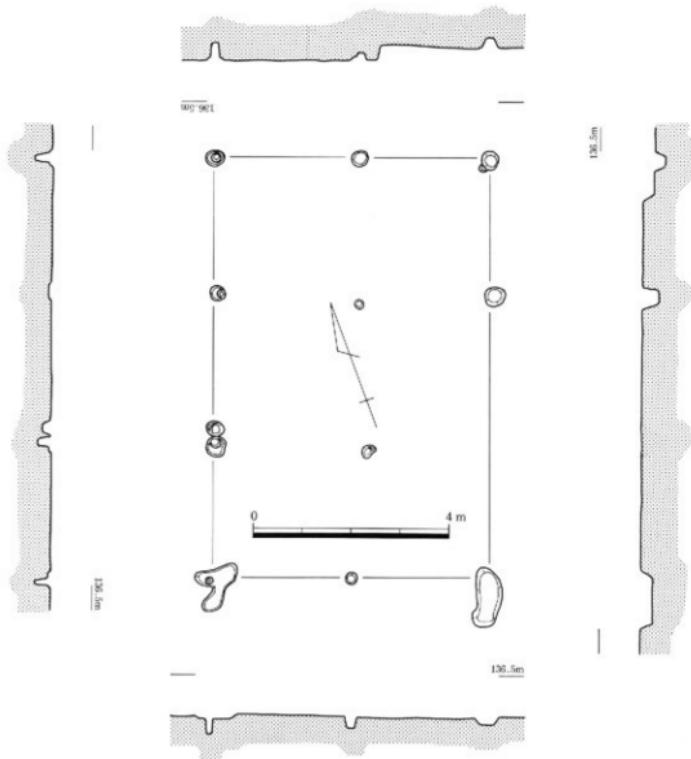
遺物は柱穴から土師質皿(41・42)が出土し、図示できた。



第25図 SB 4 造構実測図(1/100)



第26図 SB 5 造構実測図(1/100)

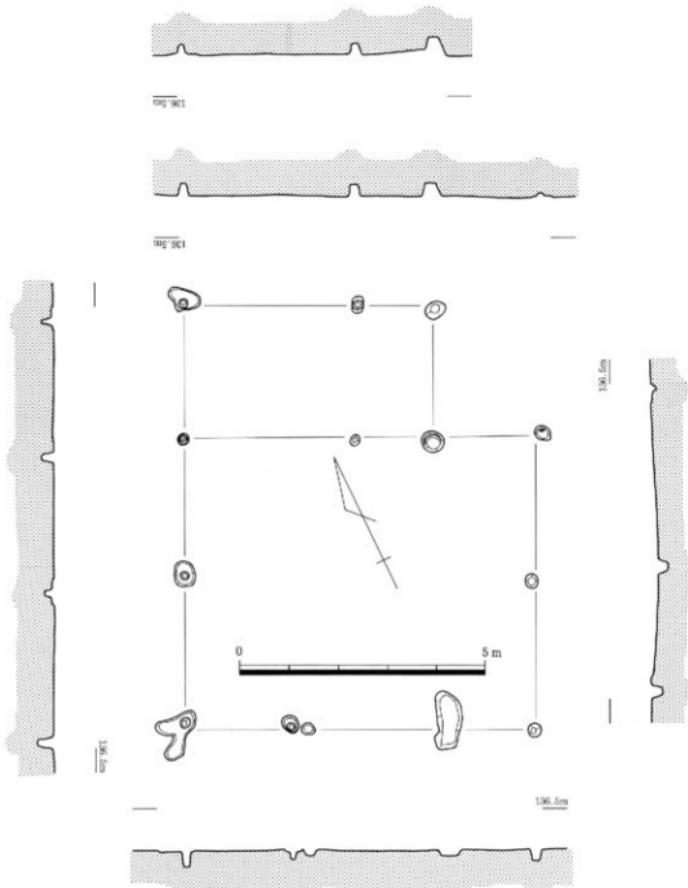


第27図 S B 6 遺構実測図(1/100)

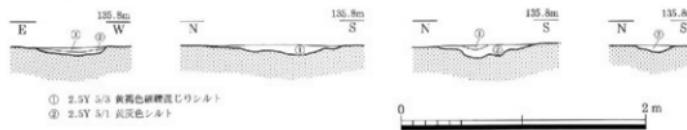
〔S B 7〕(第22・28図、図版12)

調査区の北側で検出した掘立柱建物でS B 6と重複する。規模は桁行3間(7.2m)×梁行2間(5.9m)の身舎に桁行方向に2間(5.8m)、梁行方向1間(2.7m)の張り出しを北東側にもつものである。柱間は桁行が1.8mと2.9m、梁行は平均で2.8mを測る。桁行方向はN-25°-Eに偏する。柱の掘形は円形で掘形径0.5m、柱穴径0.2m、深さ0.4mを測る。

遺物は柱穴から瓦器塊(46・47)が出土し、図示できた。



第28図 S B 7 遺構実測図(1/100)



第29図 S D 2 遺構断面実測図(1/40)

(2) 溝

[SD 1] (第30図、図版12)

調査区南側西端をN-36°-Eに偏しながら直線的に走る素掘溝で、南端は南東方向に屈曲するようである。規模は検出長13.25mである。溝の幅は上端で0.45m、下端0.3mで、深さは0.1mを測る。溝の埋土は黄灰色粗砂混じりシルトが堆積していた。

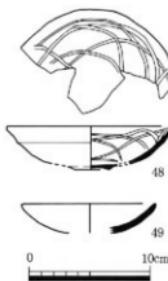
遺物は瓦器塊(48)が図示できた。

[SD 2] (第29・30図)

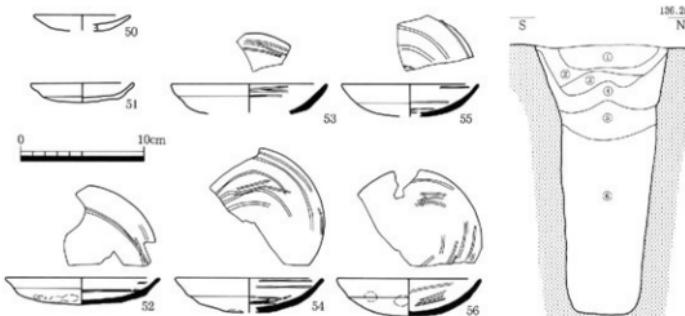
調査区北側で検出した素掘溝である。溝はSB 6・7の建物の西側、南側を囲むようにめぐっている。更に南西側で一部SB 5と重複して南側に約10mの字状に突出している。

規模は検出長38mで、最大幅が上端で1.6m、下端0.3mで、深さは0.1mを測る。溝の埋土は2層で、上層は黄褐色細礫混じりシルト、下層は黄灰色シルトが堆積していた。

遺物は瓦器塊(49)が図示できた。



第30図 SD 1・2
出土遺物実測図



第31図 SE 1 出土遺物実測図

- ① 10Y 5/1 黄褐色粗砂混じりシルト
- ② 2.5Y 6/3 にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
- ③ 2.5Y 6/1 黄褐色細礫混じりシルト
- ④ 10YR 3/4 にぶい黄褐色細礫混じりシルト
- ⑤ 10YR 4/2 深黄褐色粗砂混じり粗粒土
- ⑥ 10YR 5/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粗粒土(玉石含む)

(3) 井戸

[SE 1] (第31・32図、図版6・12)

調査区南側、SB 1の西側約2mで検出した。平面形が梢円形の素掘井戸である。規模は上端が長径1.45m、短径1.2m、底径が0.45m、深さが1.66mを測り、断面形が逆台形を呈する。

埋土は6層からなり、上層5層は灰色系の細礫混じりシルト、下層はにぶい黄褐色細礫混じり粗砂が堆積していた。



第32図 SE 1 逆構断面
実測図(1/40)

遺物は土師質土器や瓦器、陶磁器が出土し、土師質皿(50・51)、瓦器塊(52~56)が図示できた。

(4) 土坑

[SK 1] (第33図)

調査区南側でSB3の東側柱列と重複して検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸1.05m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-14°-Eに偏する。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は土師質土器、瓦器、須恵質土器が出土し、土師質皿(58)、瓦質皿(59)が図示できた。

[SK 2] (第33図)

調査区南側でSE1の北側約1mで検出した。平面形は橢円形を呈し、規模は長径1.0m、短径0.5m、深さ0.2mを測る。主軸方向はN-30°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は土師質土器、瓦器が出土し、土師質皿(57)が図示できた。

[SK 3] (第33図、図版13・14)

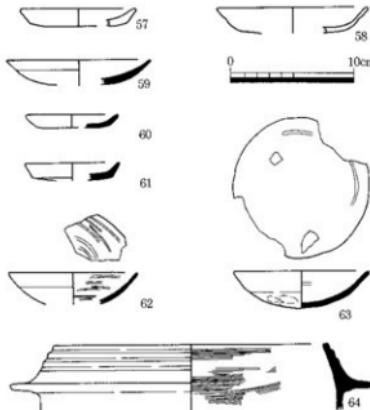
調査区南側でSB1と重複して検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.8m、短軸1.6m、深さ0.13mを測る。主軸方向はN-73°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は土師質土器、瓦器、陶磁器が出土し、瓦器皿(60・61)・塊(62・63)、瓦質土釜(64)が図示できた。

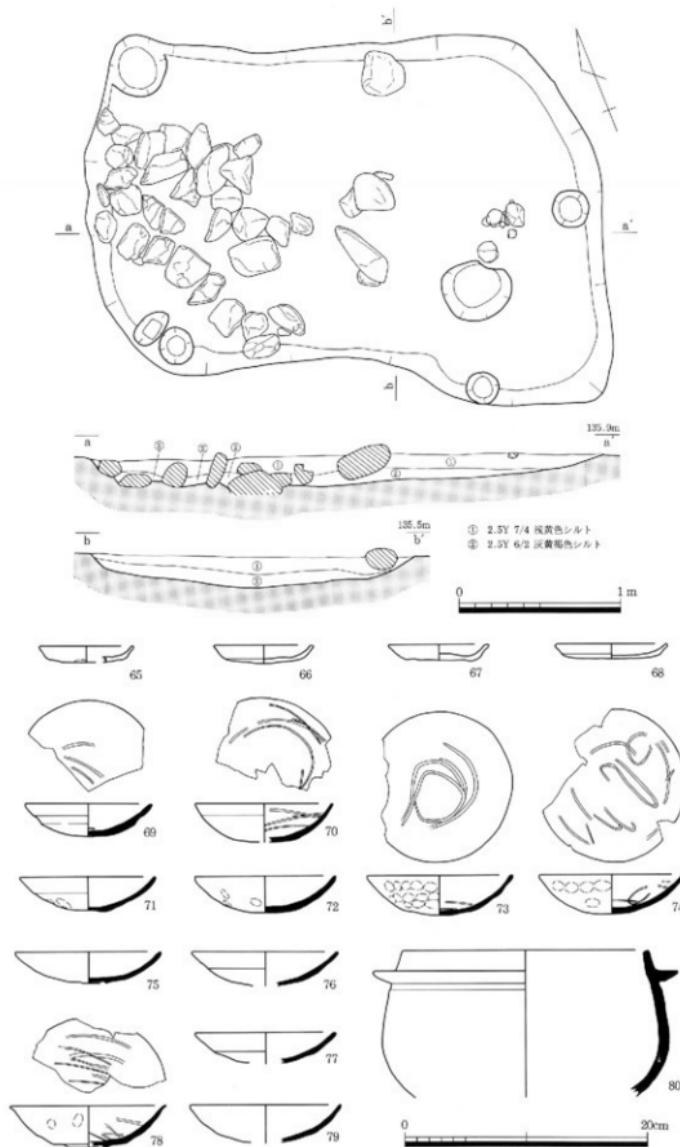
[SK 4] (第34図、図版7・13)

調査区南側でSK3の北側に接して検出した。平面形はやや不定形な隅丸方形を呈し、規模は長軸3.25m、短軸2.35m、深さ0.52mを測る。主軸方向はN-70°-Wに偏する。埋土は上下2層で、上層は浅黄色シルト、下層は灰黄褐色シルトが堆積していた。土坑西側では最大50cm×30cm×20cmの川原石が46個以上出土した。

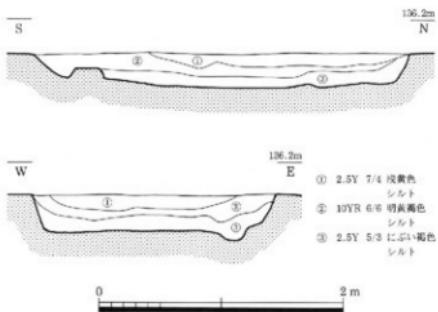
遺物は土師質土器、瓦器が出土し、土師質皿(65~68)、瓦器塊(69~79)、瓦質土釜(80)が図示できた。



第33図 SK 1 ~ 3 出土遺物実測図



第34図 SK 4 造構実測図(1/30)及び出土遺物実測図



第35図 SK 6 遺構断面実測図(1/40)

〔SK 5〕

調査区南側でSB 3の西側に接して検出した。SK 6と重複する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸3.35m、短軸1.85m、深さ0.52mを測る。主軸方向はN-77°-Wに偏する。埋土は上中下の3層で、上層は浅黄色シルト、中層は明黄褐色シルト、下層はにぶい褐色シルトが堆積していた。

遺物は土師質土器、瓦器、陶磁器などが出土したが、実測可能な遺物は出土しなかった。

〔SK 6〕(第35図)

調査区南側でSB 3の西側に接して検出した。SK 5と重複する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸2.45m、短軸2.25m、深さ0.43mを測る。主軸方向はN-14°-Eに偏する。埋土は上中下の3層で、上層は浅黄色シルト、中層は明黄褐色シルト、下層はにぶい褐色シルトが堆積していた。

遺物は土師質土器、瓦器、陶磁器などが出土したが、実測可能な遺物は出土しなかった。

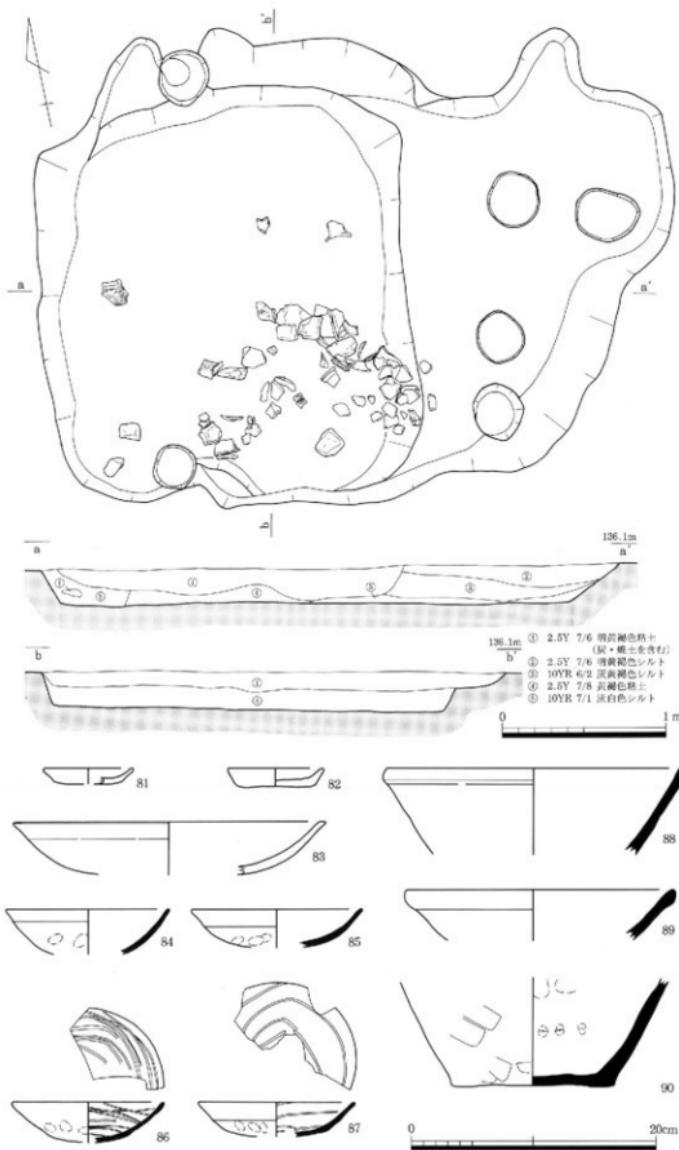
〔SK 7〕(第36・37図、図版7・13・14)

調査区南側でSB 4と重複して検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸3.85m、短軸2.85m、深さ0.31mを測る。主軸方向はN-82°-Wに偏する。埋土は5層で、上から①明黄褐色粘土(炭・焼土を含む)、②明黄褐色粘土、③灰黄褐色シルト、④黄褐色粘土、⑤灰白色シルトが堆積していた。

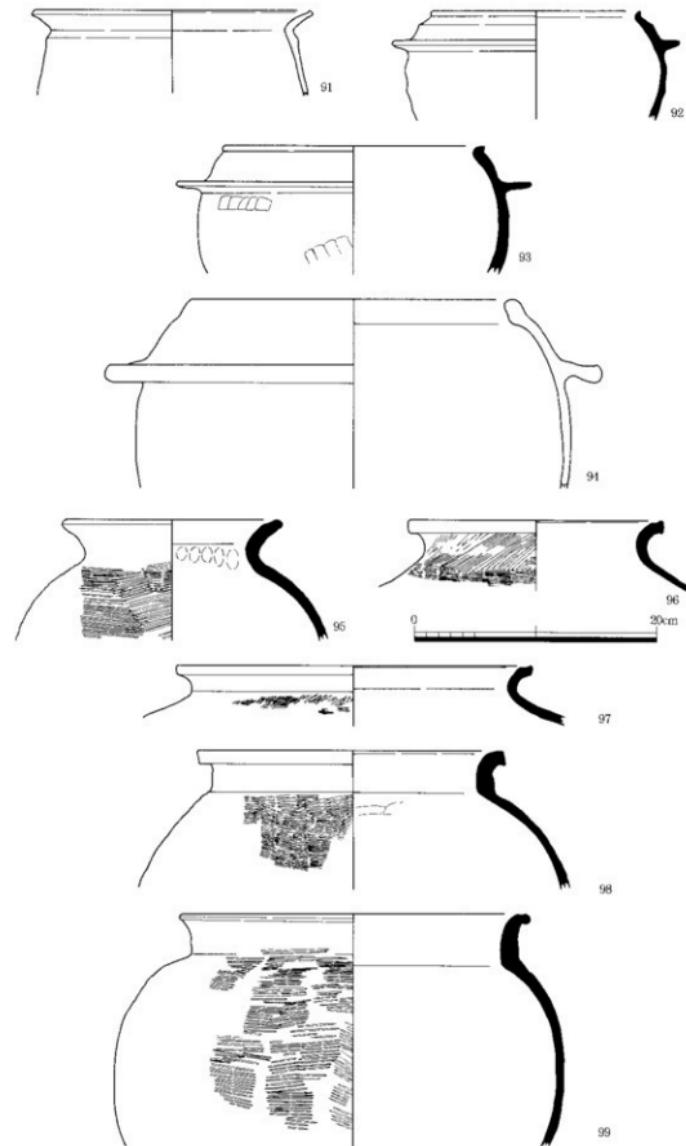
遺物は土師質土器、瓦器、瓦質土器などが出土し、土師質皿(81~83)・土釜(91・94)、瓦器塊(84~87)、瓦質土釜(92・93)・甕(96・97・99)、須恵質鉢(88・89)・甕(95・98)、備前甕底部(90)が図示できた。

〔SK 8〕(第38図)

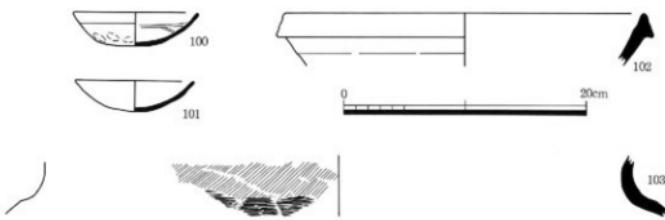
調査区中央、SB 4の北東側約5mで検出した。平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.8m、短径0.4m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-17°-Eに偏する。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。



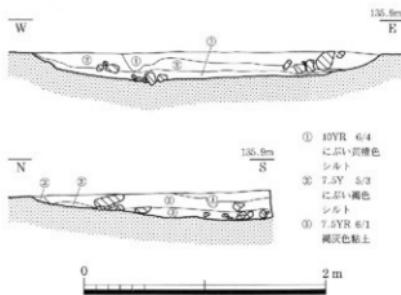
第36図 SK 7 遺構実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1)



第37図 SK 7 出土遺物実測図(2)



第38図 SK 8~10出土遺物実測図



第39図 SK 11遺構断面実測図(1/40)

遺物は須恵質壺(103)が出土し、図示できた。

[SK 9] (第38図)

調査区北側、SK 4 の北側約12mで検出した。平面形は不定形を呈し、規模は長軸1.15m、短軸0.5m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-88°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は須恵質練鉢(102)が出土し、図示できた。

[SK 10] (第38図、図版14)

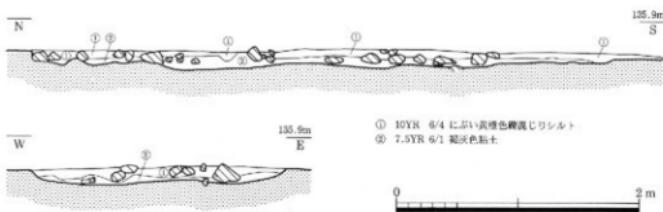
調査区北側、SB 7 の東側約3mで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.6m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-6°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は瓦器塊(100・101)が出土し、図示できた。

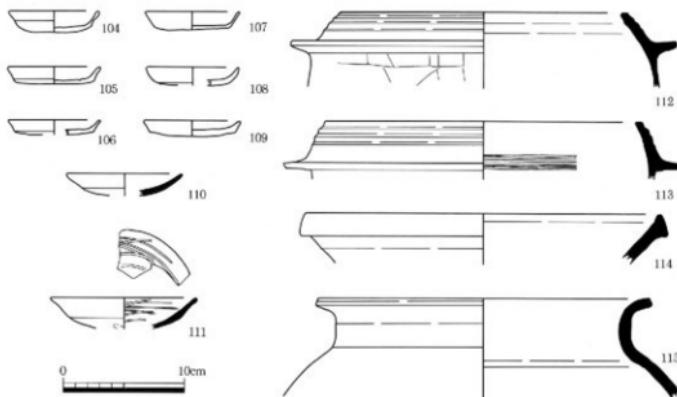
[SK 11] (第39図)

調査区北側、SB 7 の東側約7mで検出した。平面形は円形を呈し、規模は長径2.95m、短径2.8m、深さ0.25mを測る。埋土は上中下の3層で、上層はにぶい黄橙色シルト、中層はにぶい褐色シルト、下層は褐灰色粘土が堆積している。

遺物は出土しなかった。



第40図 SK 12遺構断面実測図(1/40)



第41図 SK 12出土遺物実測図

[SK 12] (第40・41図)

調査区北側、SB 7の一部と重複して検出した。平面形は不定形な隅丸方形を呈し、規模は長軸5.7m、短軸2.25m、深さ0.34mを測る。主軸方向はN-26°-Eに偏する。埋土は玉石が混入し、上下2層に分層され、上層はにぶい黄橙色疊混じりシルト、下層は褐灰色粘土が堆積していた。

遺物は土師質皿(104~109)、瓦器塊(111)、瓦質皿(110)・土釜(112・113)、須恵質練鉢(114)・甕(115)が出土し、図示できた。

[SK 13] (第42図)

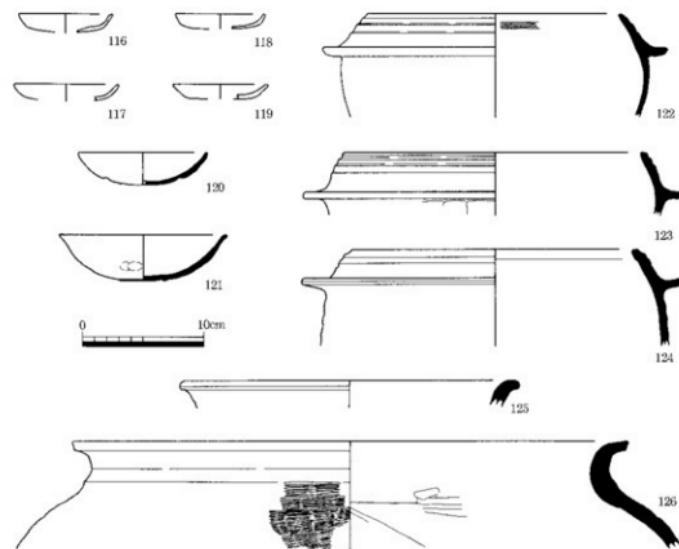
調査区北側、SK 12の西側約0.5mで検出した。平面形は円形を呈し、規模は径0.6m、深さ0.38mを測る。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は土師質皿(116)が出土し、図示できた。

[SK 14] (第42図)

調査区北側、SK 13の北側約0.5mで検出した。平面形は不定形で、規模は長軸0.9m、短軸0.75m、深さ0.07mを測る。主軸方向は南北を示す。埋土は灰黄褐色シルトが堆積し

上原北遺跡



第42図 SK 13~15出土遺物実測図

ていた。

遺物は土師質皿(117)が出土し、図示できた。

〔SK 15〕(第42図、図版15)

調査区北側、S B 6 と一部重複して検出した。平面形は不定形で、土坑の北側部分は調査区外に広がる。規模は長軸8.45m、短軸2.15m、深さ0.48mを測る。主軸方向はN-66°-Wに偏する。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は土師質皿(118・119)、瓦器塊(120・121)、瓦質土釜(122~124)・甕(125・126)が出土し、図示できた。

(5) 遺物出土ピット

〔SP 1〕(第43図、図版15)

調査区南側、S B 3 の東側柱列と近接して検出した。平面形は円形で、規模は径0.2m、深さ0.17mを測る。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は瓦器塊(133)が出土し、図示できた。

〔SP 2〕(第43図)

調査区南側、S E 1 の南側に近接して検出した。平面形は円形で、規模は径0.25m、深さ0.23mを測る。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は瓦器塊(134)が出土し、図示できた。

〔S P 3〕(第43図、図版15)

調査区南側、S B 3の中央で検出した。平面形は楕円形で、規模は長径0.45m、短径0.35m、深さ0.16mを測る。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は土師質皿(127・128)、瓦器皿(129)が出土し、図示できた。

〔S P 4〕(第43図)

調査区南側、S K 7の南側肩で検出した。平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ0.21mを測る。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は瓦器皿(130)が出土し、図示できた。

〔S P 5〕(第43図、図版15)

調査区南側、S K 7の南側肩で検出した。平面形は円形で、規模は径0.2m、深さ0.13mを測る。埋土は灰黄褐色シルトが堆積していた。

遺物は瓦器皿(131・132)が出土し、図示できた。



第43図 S P 1～5 出土遺物実測図

(6) 包含層 (第44図、図版15)

調査地は段丘上の耕作地であった為削平が多く、また遺構面も浅かったことから、遺物包含層は、調査区全域からは確認できなかった。確認できた層厚は最大約0.15mであった。

出土遺物中、図示できたのは土師質皿(135～141)、瓦器皿(142・143)・塊(144～147)、瓦質片口(150)・土釜(156)・甕(157)、須恵質甕(152)、信楽播鉢(153)、備前播鉢(154・155)・甕(158)、白磁碗(151)、中国輸入錢(148)、不明鉄製品(149)である。

4まとめ

調査の結果、遺構は建物を中心に大きく南北2群に分類できる。

南の一群はS B 1～4の建物、S K 1～7の土坑、S E 1の井戸などである。S B 1・2は主軸方向を同じとして重複し、他の2棟はそれぞれ異にしている。また土坑も建物と重複している。それぞれの遺構の切り合いや遺物の時期差からの遺構の併行関係は不明である。

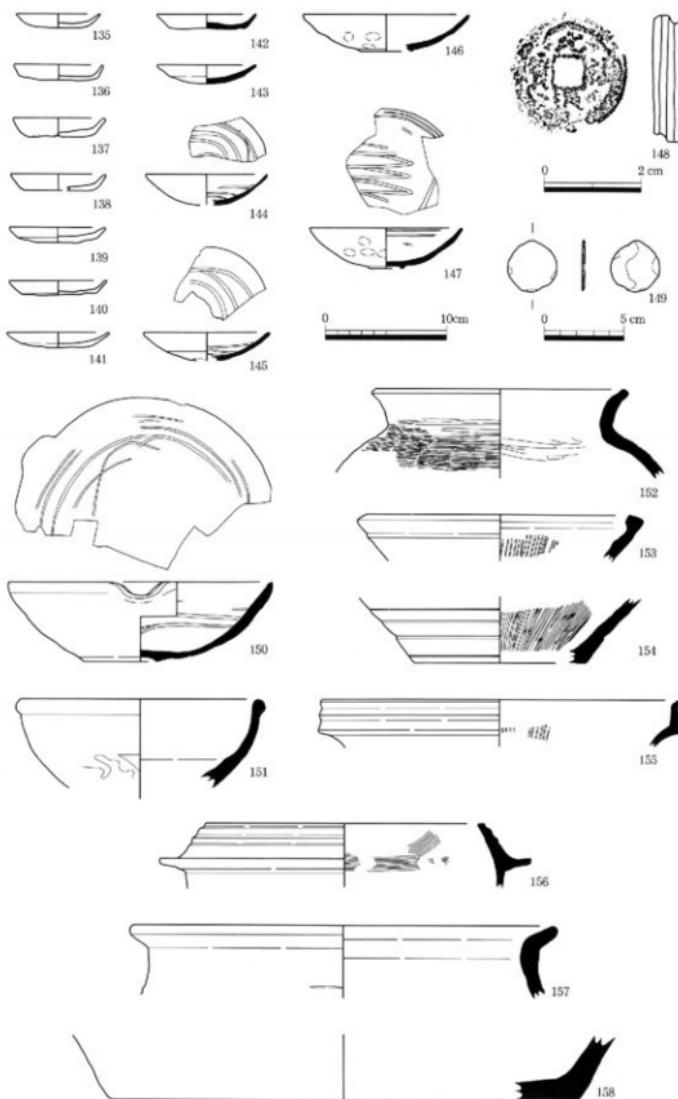
北の一群はS B 5～7の建物とS D 2の溝、S K 9～15の土坑などである。S B 5とS B 7は主軸方向が直交するように位置し、同時並行で存在していた可能性がある。S B

6は主軸方向が少し他の2棟より東に偏してゐる。SD2は、説明で一つの遺構として説明しているが、切り合い関係の不明な溝が重複しているもので、建物の雨落ち溝の可能性が高い。SB5・7とSB6との前後関係は、遺構の切り合いや遺物からは判断できなかつた。

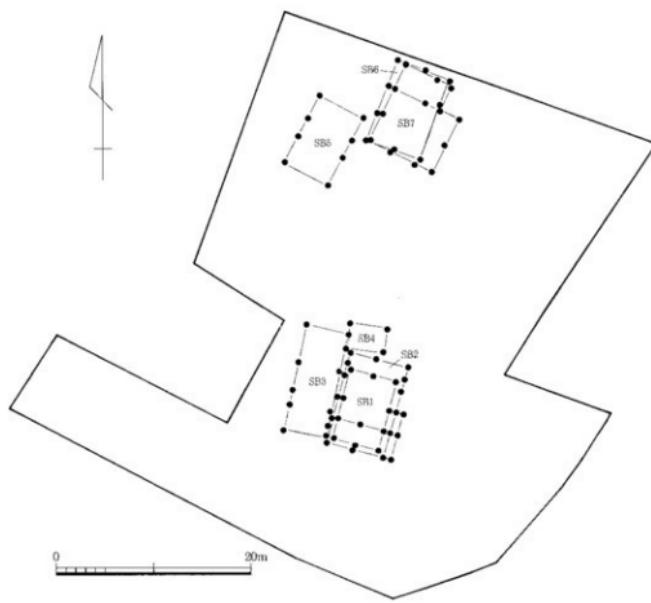
この2群の状況から、調査の結果として異なる屋敷地2ヶ所を検出した可能性が高い。また、遺物については出土した瓦器塊の時期から見て、尾上編年IV-3の範疇であり、検出遺構も大部分がこの時期となる。

曆年代は13世紀末から14世紀初頭が考えられる。

尾谷



第44図 包含層出土遺物実測図



第45図 SB 1 ~ 7 配置模式図(1/500)



第46図 遺構配置図(1/300)

第4節 昭栄町東遺跡(S E 99-1)

1 概略

平成12年2月、(仮称)市立複合文化会館の建設に先立ち試掘調査を実施した。その結果、遺構、遺物を検出し、新規発見遺跡として「昭栄町東遺跡」と命名した。

当該遺跡は石川の中位段丘上に位置し、標高は約130mである。調査地は、文化9年(1812)に描かれた『上原村絵図』に見られる灌漑用水地「ひる池」の東側にあたることが予想された。調査の結果、縄文時代、中近世の遺構、遺物を検出した。



第47図 調査区位置図(1/5000)

2 遺構と遺物

遺構は堤、土坑、落ち込み、ピット、暗渠を検出した。調査面積は約150m²である。基本層序は、現地表面から盛土(層厚1.3m)、旧耕土(同0.3m)、床土(同0.05m)、2.5YR 5/3黄褐色疎混じり細砂(同0.1m)であった。

(1) 土坑

〔S K 1〕

S K 1は調査区南端に位置する。遺構の平面形は不定形で、検出規模は長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.26mを測る。

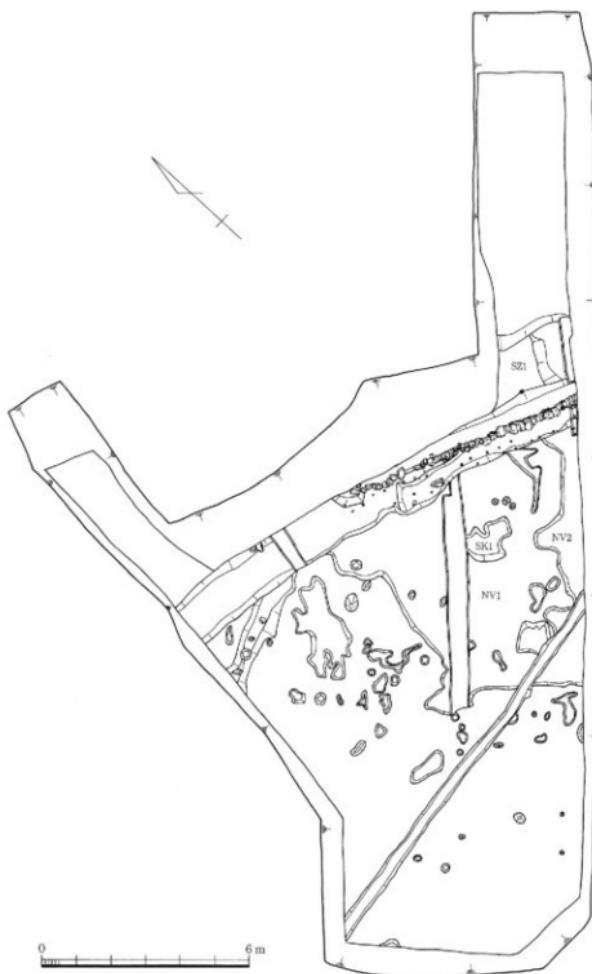
遺物はサヌカイト剝片が出土したが、細片のため図化できなかった。

(2) 堤

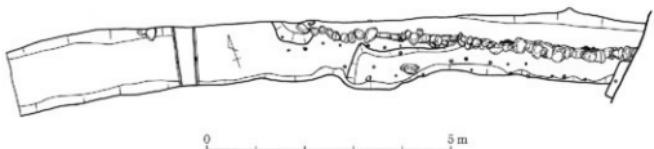
〔S Z 1〕(第49・50図)

S Z 1は調査区北側に位置する。遺構の構造は、北側に広がる池の周囲に盛土を行って堤とし、堤の外側に沿って溝を掘削している。溝内には溝に沿って杭を多数打ち、マツと見られる丸太を止めていた。裏込めにこぶしだから人頭大の川原石を積み、溝を整備していた。

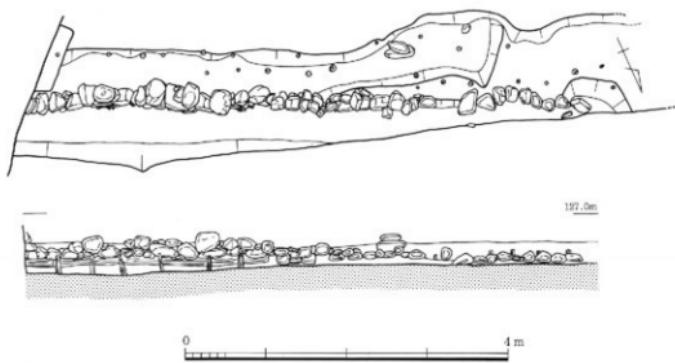
検出した堤の規模は、全体の長さ11.8m、幅3.2m、高さ1.2m、堤の外側の溝の長さ



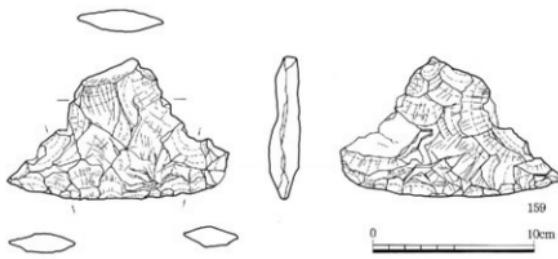
第48図 遺構配置図(1/140)



第49図 S Z 1に伴う溝の全体図(1/100)



第50図 S Z 1に伴う溝の立面図(1/60)



第51図 NV 1出土遺物実測図

12.8m、幅1.4m、深さ0.18mである。石組の長さ6.9m、残存高0.33mを測る。堤の主軸方向はN-73°-Wである。

遺物は出土しなかった。

(3) 落ち込み

[NV 1] (第51図、図版15)

NV 1は調査区中央に位置する。遺構の平面形は北側をS Z 1に切られ、東側は調査区外に及ぶため不明である。検出規模は、南北軸6.95m、東西軸7.0m、深さ0.07~0.2mを

測る。

遺物は、縄文時代の石匙(159)、土師質土器、瓦質土器、瓦が出土した。(159)以外は細片のため図化できなかった。

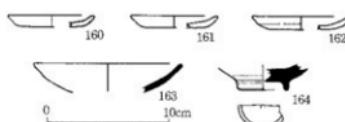
[NV 2]

NV 2は調査区東側に位置する。遺構の平面形は遺構が調査区の東側に及ぶため不明である。検出規模は、長軸5.0m、短軸1.4m、深さ0.01~0.06mを測る。

遺物はサヌカイト剝片が出土したが、細片のため図化できなかった。

(4) 包含層(第52図)

遺物は、土師質皿(160~162)、瓦器塊(163)、瓦質甕・土釜、青磁、国産陶磁器(164)、平瓦が出土した。(160~164)
以外は細片のため図化できなかった。



第52図 包含層出土遺物実測図

4まとめ

調査の結果、縄文時代の石匙や摩滅の少ないサヌカイト剝片が出土したことから、縄文時代には調査地付近で集落や石器製作地などが存在した可能性が考えられる。また近世では『上原村絵図』^(註1)に描かれた「ひる池」の堤の様子が確認され、当時の土木技術を知る良好な資料が得られたことは成果であった。

今後も周辺地の調査で資料の増加が期待される。

島羽

(註1) 『河内長野市文化財調査報告書第7輯 河内長野の古絵図』 河内長野市教育委員会 1983年

第5節 清水遺跡(SMZ00-1)

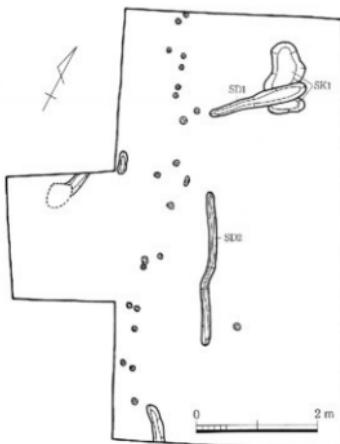


第53図 調査区位置図(1/5000)

1 概略

当該遺跡は、金剛山地を水源とする天見川の右岸に位置し、当該調査区は清水に所在する。標高は約176mである。遺跡の西側には京都と高野山をつなぐ高野街道が通っている。

本次調査は個人住宅の建築に先立ち実施した。調査区は建物の基礎工事の切土で影響を受ける範囲について設定した。調査面積は約31m²である。



第54図 遺構配置図(1/80)

2 遺構と遺物

遺構は、溝、土坑を検出した。基本層序は、現地表面から耕土(層厚0.05m)、床土(同0.05m)、10YR4/4褐色礫混じり細砂(同0.1m)であった。

(1) 溝

[SD1]

SD1は調査区北側に位置する。遺構の規模は、長さ1.65m、幅0.25m、深さ0.03mである。主軸方向はN-47°-Eである。

遺物は出土しなかった。

[SD2]

SD2は調査区の中央に位置する。遺構の規模は、長さ2.47m、幅0.12m、深さ0.02mである。主軸方向はN-29°-Wである。

遺物は出土しなかった。

清水遺跡

(2) 土坑

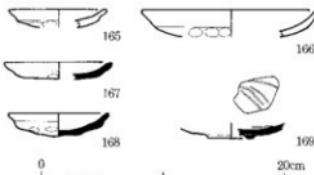
[SK1]

SK1は調査区の北側に位置し、SD1に切られている。遺構の平面形は不定形である。検出した遺構の規模は、長軸1.15m、短軸0.55m、深さ0.03mを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 包含層(第55図、図版16)

遺物は土師質皿(165・166)、須恵質土器、瓦器皿(167・168)・塊(169)、陶磁器が出土した。(165~169)以外は細片のため図化できなかった。



第55図 包含層出土遺物実測図

3まとめ

当該遺跡は発掘調査例がないが、本次調査の限りでは15世紀を中心とする遺跡であることがわかった。今後も文化財保護に重点を置かなければならぬ遺跡であることが再認識できた。

鳥羽

第6節 大日寺遺跡(DNT00-4)

1 概略

大日寺遺跡は、烏帽子形山から東に派生する尾根上に立地する。弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。当該調査地は遺跡の西部に位置し、平成5年度、8年度、11年度の発掘調査により、周辺部からは中世及び弥生時代の遺構、遺物が出土した。

周囲には、遺跡の西に隣接して中世の山城である烏帽子形城跡、東0.5kmに中世の山城である河合寺城跡、北0.3kmに長野神社遺跡、南0.3kmに古墳時代の集落遺跡が検出された喜多町遺跡が立地する。

本次調査は大和川下流域下水道長野中継ポンプ場の築造工事に伴う隣接地の機能回復工事に先立ち行った。調査面積は約350m²である。調査は平成12年8月18日から9月25日にかけて行った。

2 遺構と遺物

当該調査地からは弥生時代の溝、中世の鋤溝、土坑、近世の溝を検出した。基本層序は4層であり、上層から耕土(7.5YR4/1褐灰色シルト 層厚0.1m)、床土(7.5YR6/8橙色粘土 同0.5m)、遺物包含層(10YR5/2灰黄褐色細砂 同0.2m)となる。

(1) 溝

〔S D 1〕(第58・59図、図版10・16)

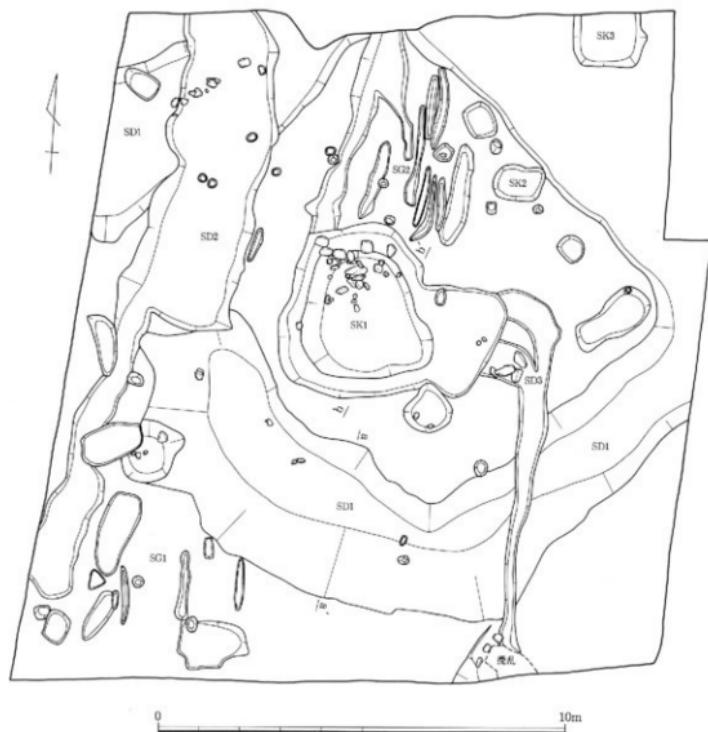
S D 1は北西部の隅角を除き、1辺が10m前後の方形に巡る。規模は幅約2.5~3 mであり、深さ0.6mである。

遺物は弥生土器が出土したが、何れも小片であり、壺の底部(171)、口縁部(170)のみ図化できた。

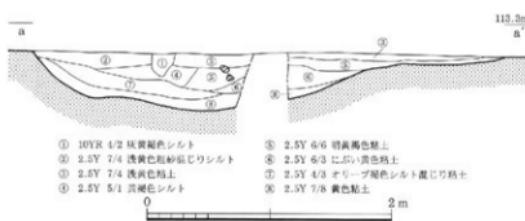
S D 1の時期は、文様が施されている破片に、廉状文が最も多く見られ、凹線文もみられることから、弥生時代中期後半のものと考えられる。S D 1はその形状から方形周溝墓の可能性があると考えられる。方形周溝墓であるならば、長辺が10m、短辺が8 mで、



第56図 調査区位置図(1/5000)



第57図 遺構配置図(1/120)



第58図 S D 1 遺構断面実測図(1/40)

北西部の隅角に陸橋部を有するものとなる。

〔S D 2〕(第59図、図版16)

S D 2 は調査区西端を南北方向に走る。規模は長さ約15.2m、幅は北部で約2.5m、南部で約1m、深さは約0.2mであった。

遺物は須恵器坏身(172)、鉄釘

(173)が図化できた。これらの遺物の他に瓦質土器、土師質土器、肥前系陶磁器が出土した。

S D 2 の時期は、出土遺物には古い時代のものも混入しているが、肥前系陶磁器が出土したことから、17世紀初頭のものと考えられる。

〔S D 3〕

S D 3 は調査区の南東部に位置し、S K 1 によって切り込まれていた。遺構は北部で2条に分かれていた。規模は長さ8.6m、幅0.25~0.95m、深さ0.03~0.1mであった。

遺物は何れも小片のため図化できなかったが、土師質皿、瓦質土器等が出土した。

S D 3 の時期は、15世紀代のものと考えられる。

(2) 鋤溝

〔S G 1〕

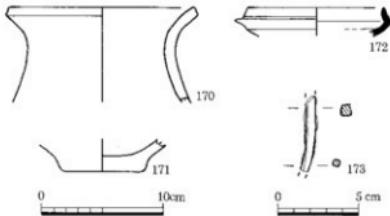
S G 1 は調査区の南西部に位置する。鋤溝は5条認められた。個々の鋤溝の規模は、長さ0.44~1.7m、幅0.3m、深さ0.03~0.06mであった。

遺物は小片のため図化できなかったが、土師質土器が出土した。

〔S G 2〕(第60図)

S G 2 は調査区の北部に位置する。鋤溝は8条認められた。個々の鋤溝の規模は、長さ約1~2.5m、幅0.2~0.5m、深さ0.02~0.2mであった。

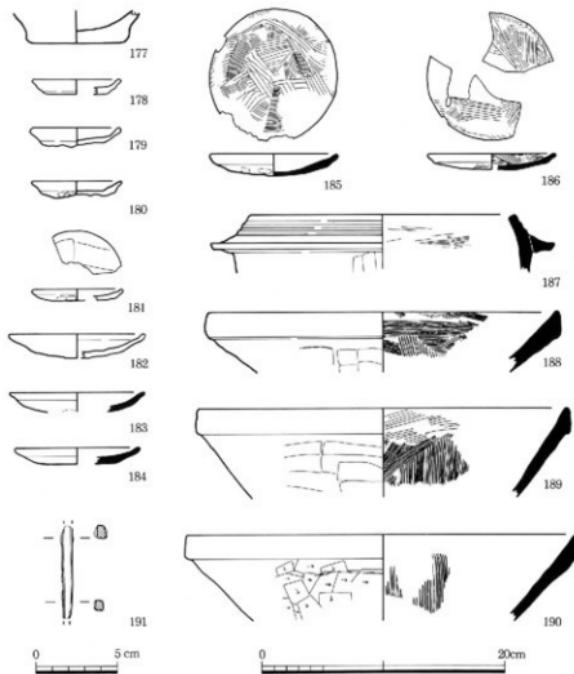
遺物は土師質皿(174)、瓦質擂鉢(175・176)が図化できた。



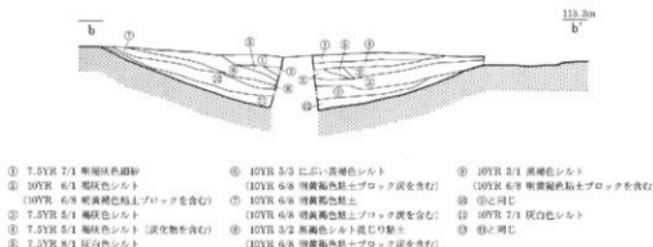
第59図 S D 1 · 2出土遺物実測図



第60図 S G 2出土遺物実測図



第61図 SK 1 ~ 3 出土遺物実測図



- ① 7.SYR 7/1 斷面灰色シート
② 10YR 6/8 黄褐色シート
(10YR 6/8 明黄褐色粘土ブロック炭を含む)
③ 7.SYR 5/1 黄褐色シート
④ 7.SYR 5/1 黄褐色シート (炭化物を含む)
⑤ 7.SYR 8/1 反白色シート
⑥ 10YR 5/3 にぶい黄褐色シート
(10YR 6/8 明黄褐色粘土ブロック炭を含む)
⑦ 10YR 6/8 明黄褐色粘土
(10YR 6/8 明黄褐色粘土ブロック炭を含む)
⑧ 10YR 3/1 黒褐色シート
(10YR 6/8 明黄褐色粘土ブロック炭を含む)
⑨ ⑧と同じ
⑩ 10YR 7/1 灰白色シート
⑪ ⑩と同じ

第62図 SK 1 遺構断面実測図(1/40)

(3) 土坑

[SK 1] (第61・62図、図版16)

SK 1は調査区のはば中央に位置する。平面形は歪な橢円形を呈し、規模は長軸5.2m、短軸2.48m~4.4m、深さ0.46mであった。

遺物は弥生土器壺(177)、土師質皿(178・181・182)、瓦質皿(183・185・186)・擂鉢(189・190)、鉄釘(191)が図化できた。

S K 1 の時期は、瓦質擂鉢が鋤柄編年の1—2群に相当することや、土師質皿の口径が7~7.2cmを中心にしていることから15世紀前半のものと考えられる。

[S K 2] (第61図、図版16)

S K 2 は調査区北東部に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長さ1.3m、幅0.94m、深さ0.16mであった。

遺物は瓦質皿(184)・擂鉢(188)が図化できた。

S K 2 の時期は、15世紀代のものと考えられる。

[S K 3] (第61図、図版16)

S K 3 は調査区北西部に位置する。南半部のみ検出した。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長さ1.92m、幅1.72m、深さ0.11mであった。

遺物は土師質皿(179・180)、瓦質土釜(187)が図化できた。

S K 3 の時期は、土師質皿の口径が7cm前後にまで縮小していることや、瓦質土釜の口縁部の段が凹線化している事などから、15世紀後半のものと考えられる。

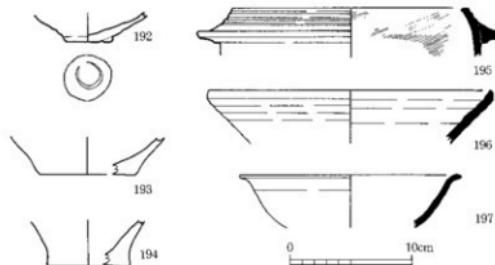
(4) 包含層

包含層からの遺物は弥生土器壺(192・193)・壺(194)、瓦質土釜(195)、須恵質練鉢(196)、青磁碗(197)が図化できた。(第63図、図版16)

3 まとめ

当該市域における弥生時代の遺跡では、三日市遺跡、大師山遺跡等でまとまった遺構、遺物が検出されている。当該遺跡では、弥生時代の遺構、遺物が遺跡の西部に集中している状況がみられたが、調査で性格を明らかにできた遺構は少なかった。今回の調査で方形周溝墓と考えられる遺構が検出できたことで、大日寺遺跡における弥生時代集落もしくは、当該市域における弥生時代の墓制の解明に大きな進展があった。

太田



第63図 包含層出土遺物実測図

第7節 天野山金剛寺遺跡(KGT00-1)

1 概略

当該遺跡は、和泉山脈の岩湧山(標高897m)より北方に伸びる赤峰丘陵と和泉丘陵に分岐する谷状地に位置する。遺跡の中心は国指定史跡「金剛寺境内」で、今回の発掘調査は史跡の北側で実施した。調査地は、天野山金剛寺境内を流れる西除川の左岸に位置し、天野町に所在する。標高は約164mである。



第64図 調査区位置図(1/5000)

2 遺構と遺物

調査区は2ヶ所設定した。調査面積は約26m²である。第1調査区から溝、第2調査区から道とみられる遺構を検出した。

基本層序は第1調査区が、現地表面から盛土(層厚0.5m)、耕土(同0.2m)、床土(同0.1m)、7.5YR5/2灰褐色疊混じり粗砂(同0.1m)であった。

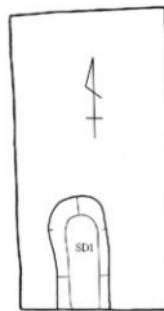
第2調査区は盛土(層厚0.4m)、耕土(同0.15m)、床土(同0.1m)、5YR7/2明褐灰色疊混じり細砂(同0.2m)、5YR4/2灰褐色疊混じり細砂(同0.1m)であった。地山は、両調査区とも5YR6/2灰褐色細砂であった。

(1) 溝

[SD1]

SD1は第1調査区南側に位置する。平面形は遺構の南側が調査区外に及ぶため不明である。検出した規模は長さ1.35m、幅0.65m、深さ0.05mを測った。

遺物は出土しなかった。

第65図 第1調査区
遺構配置図(1/60)

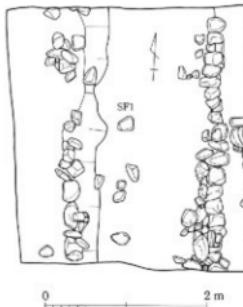
0 2 m

(3) 道

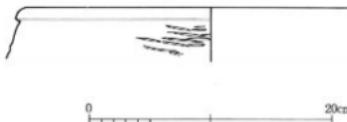
[S F 1] (第67図、図版10・16)

S F 1は第2調査区中央を南北方向に通っている。遺構の規模は南北端が調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出した規模は、長さ3.25m、幅2.0m、高さ0.09mを測った。遺構の東西辺にはこぶし大より一回り大きい川原石を並べ、土留めを行っていた。主軸方向はN-0°-Eである。

遺物は瓦質甕(198)が出土した。



第66図 第2調査区遺構配置図(1/60)



第67図 S F 1出土遺物実測図

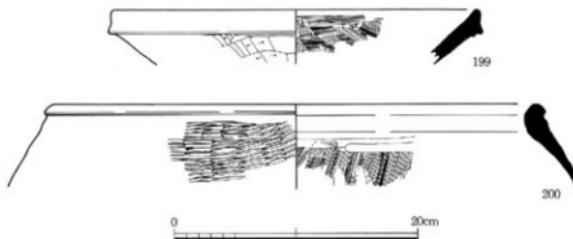
(4) 第2調査区包含層

遺物は土師質土器、瓦器、瓦質練鉢(199)・甕(200)、須恵質土器、青磁碗、備前甕、丸瓦、平瓦が出土した。(199・200)以外は細片のため実測できなかった。(第68図、図版16)

3 まとめ

本次調査は、小規模な調査面積ではあるが、軸方向が明確な道と見られる遺構を検出した。今後近接地での調査はこの軸方向が建物や建物を区画する溝などの検出に参考となるものと考えられる。したがって、面積が小規模な調査も欠かせない遺跡であることが再認識できた。

鳥羽

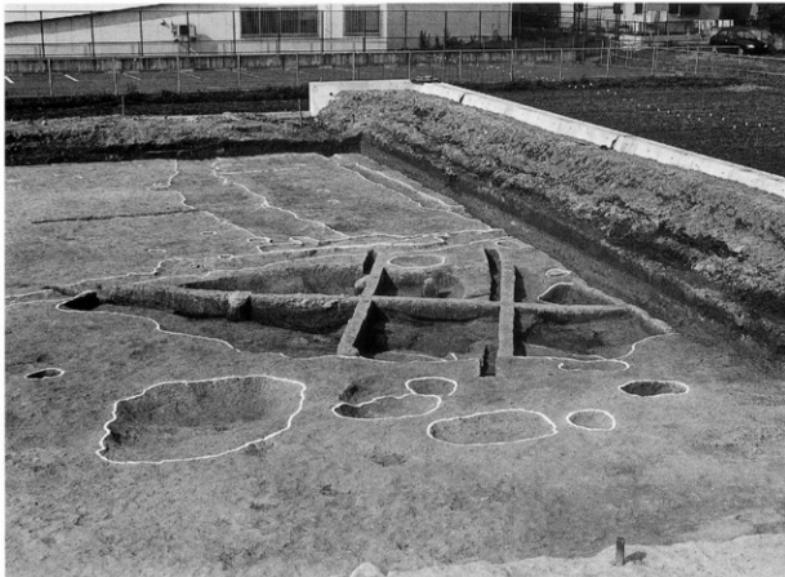


第68図 第2調査区包含層出土遺物実測図

図 版



調査区全景（南から）



SK 2

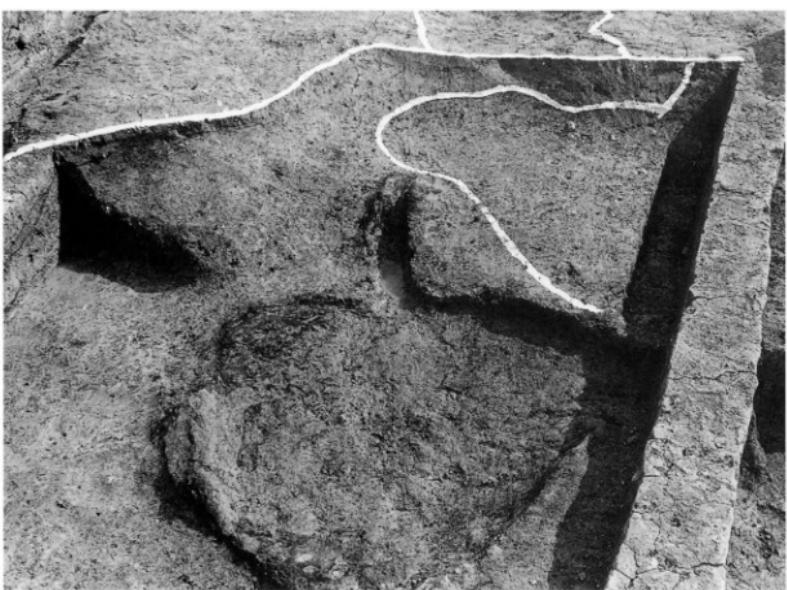
図版2 上原北遺跡 (UHN00-1)



S B I SD I (北から)



SK1 遺物出土状況



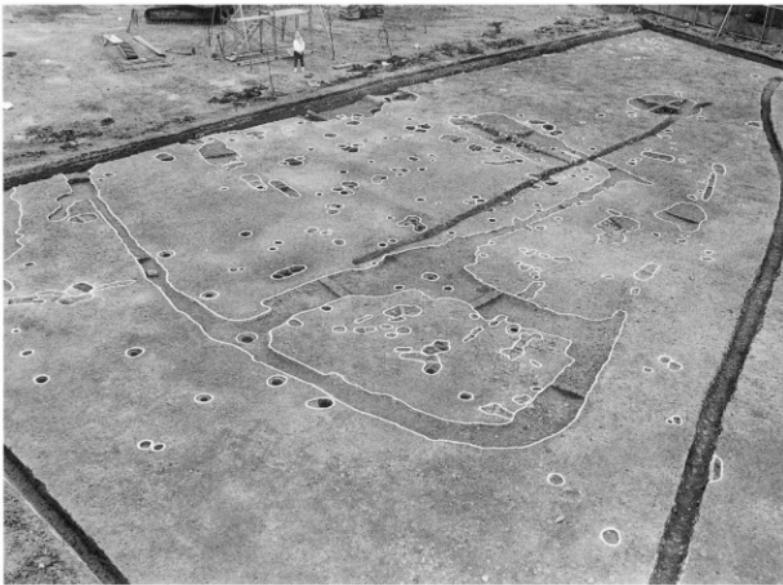
S Y 1



S Y 3



調査区全貌（上から）



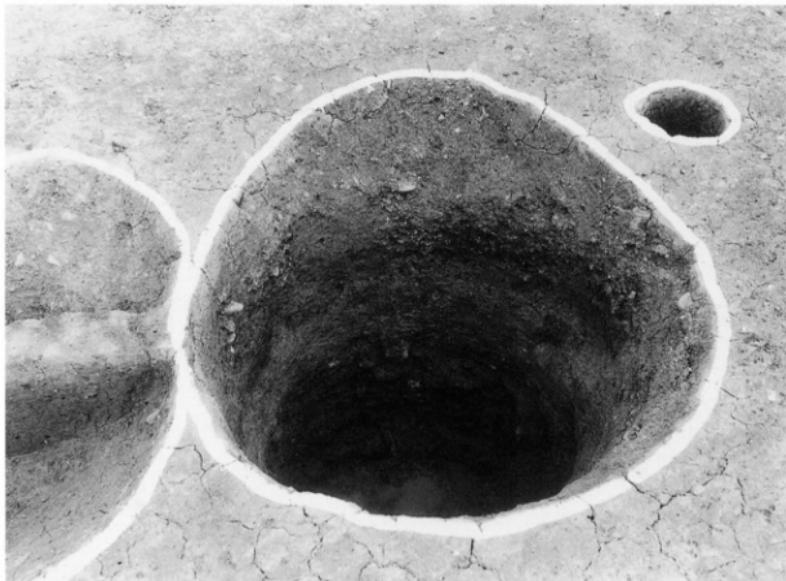
調査区全量（西から）



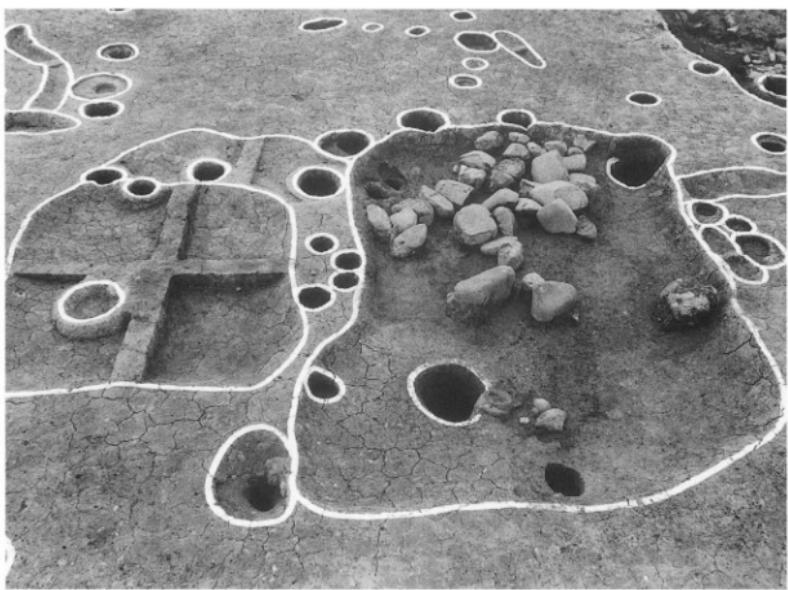
調査区全量（東から）



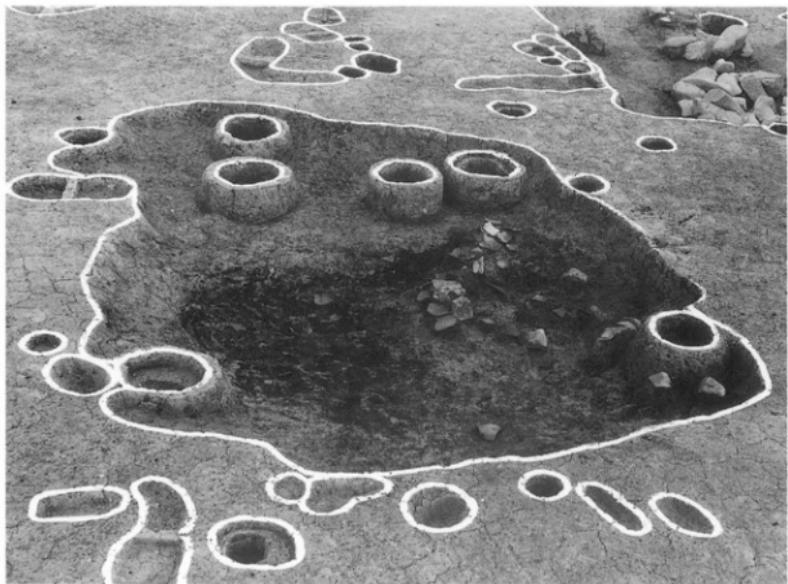
調査区全景（西から）



SE 1 (西から)



SK 4 (東から)



SK 7 (西から)



調査区全景（南東から）



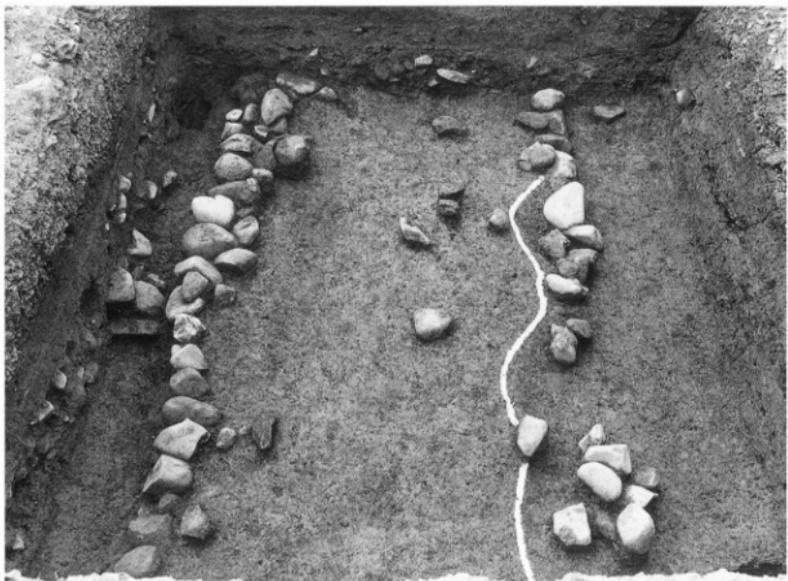
調査区全景（北から）

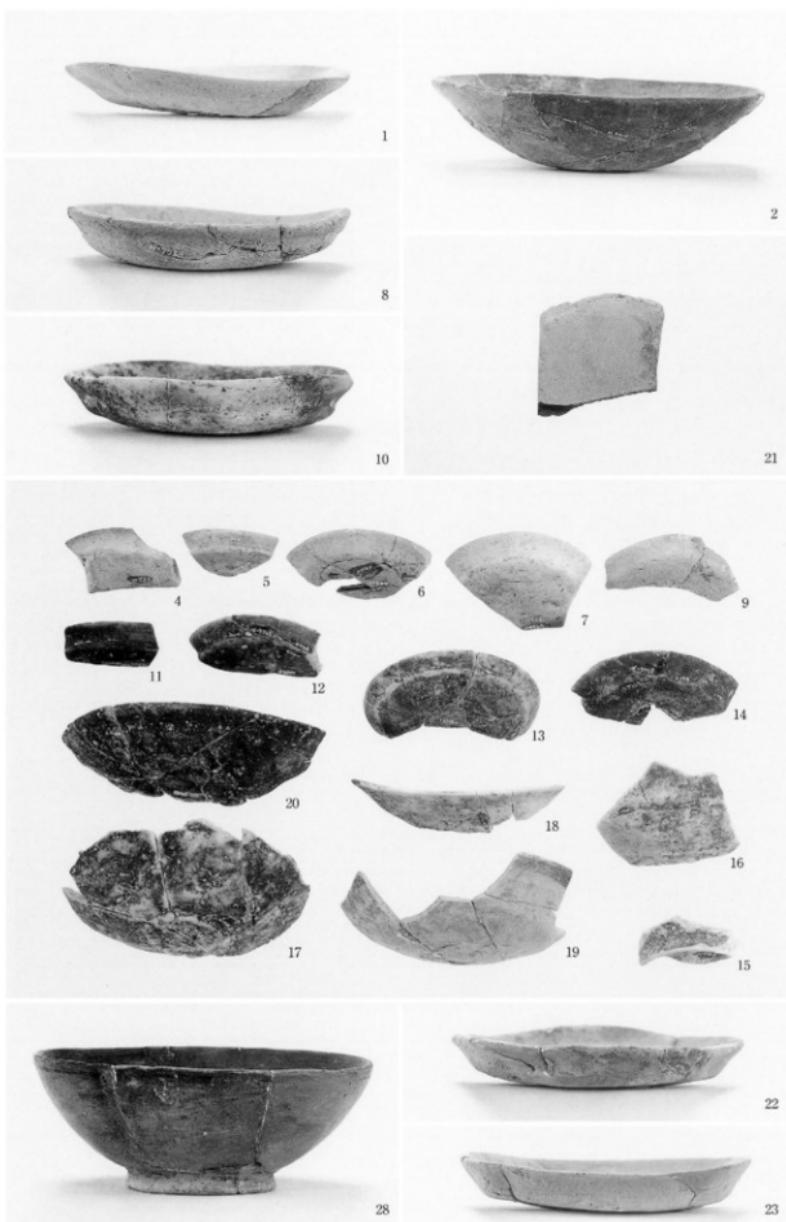


SMZ00-1 調査区全量(東から)

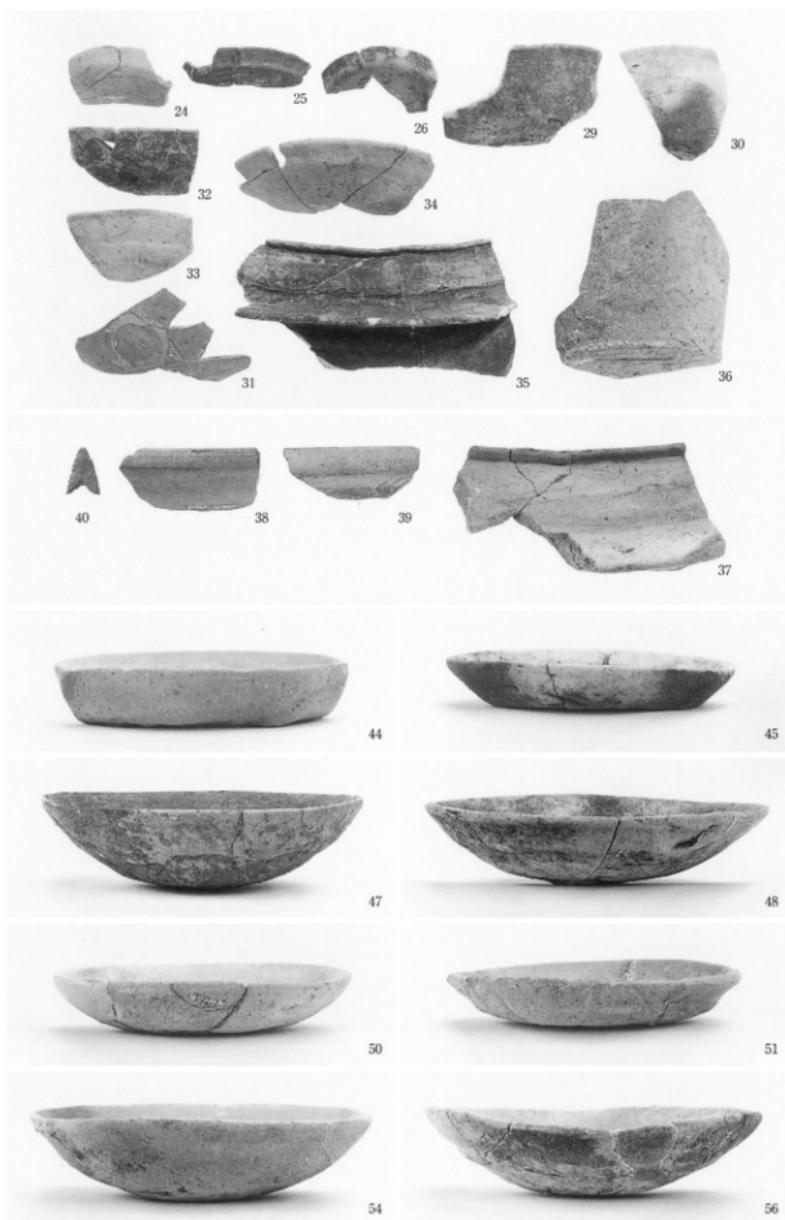


DNT00-4 調査区全量(北から)

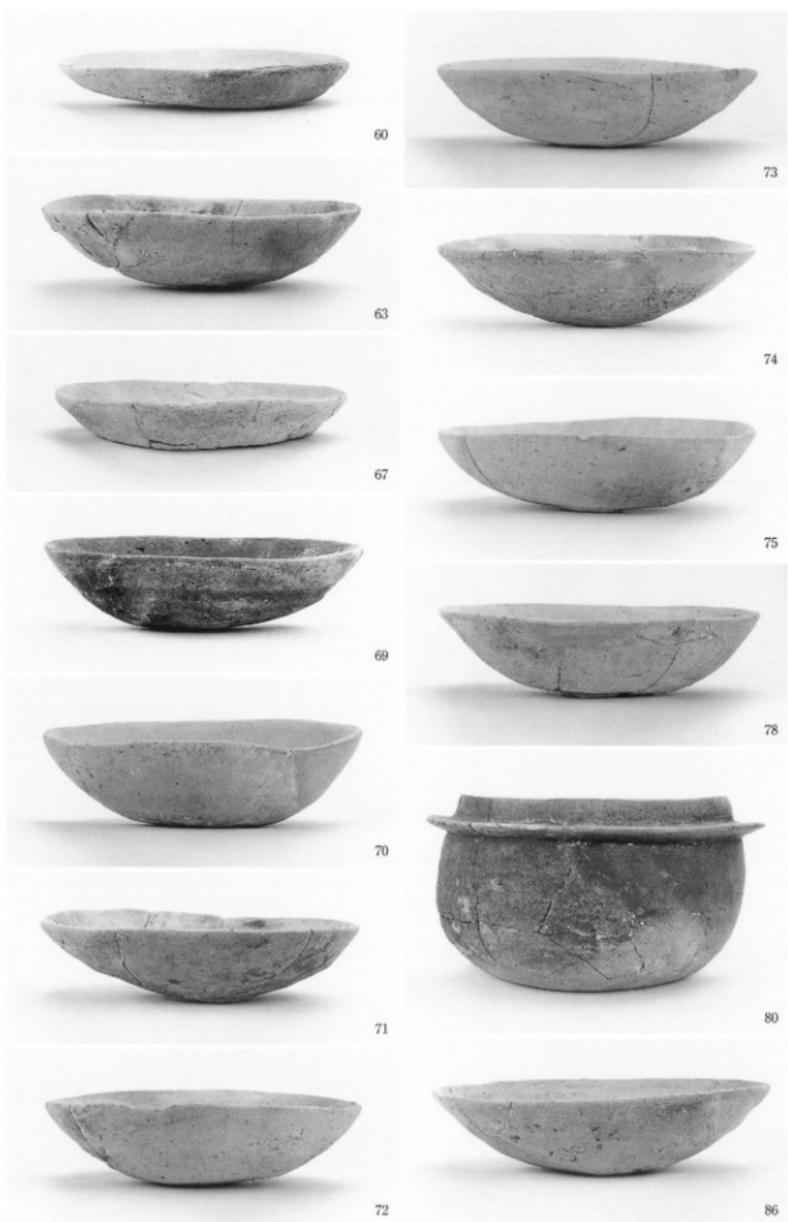




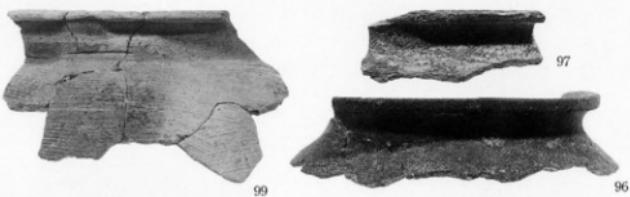
UHN00-1 SB1 (1・2)、SD4 (4～7・9・11～21)、SK1 (22・23)、SK2 (28)



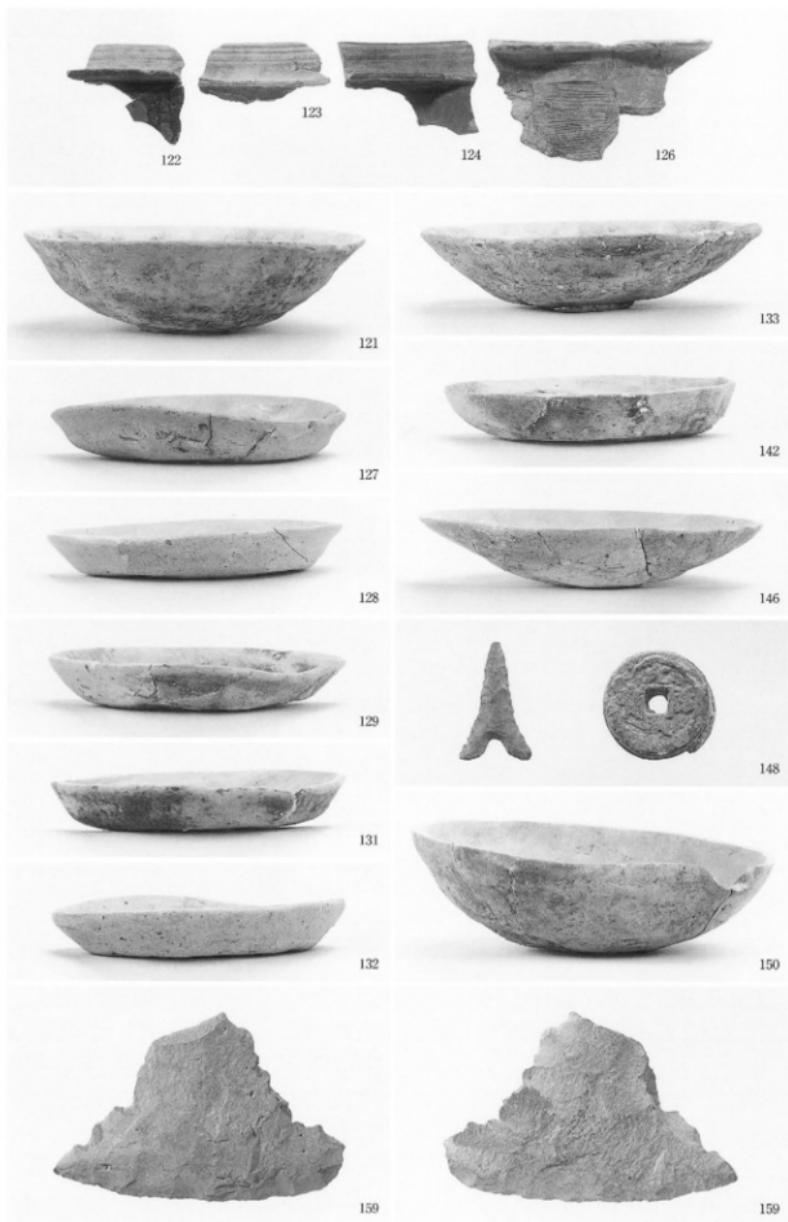
UHN 00-1 SK 1 (25・26・30・32・34)、SK 2 (24・29・31・33・35・36)、包含層 (37~40)
UHN 93-1 SB 1 (44)、SB 5 (45)、SB 7 (47)、SD 1 (48)、SE 1 (50・51・54・56)



U H N 93—1 SK 3 (60·63)、SK 4 (67·69~75·78·80)、SK 7 (86)

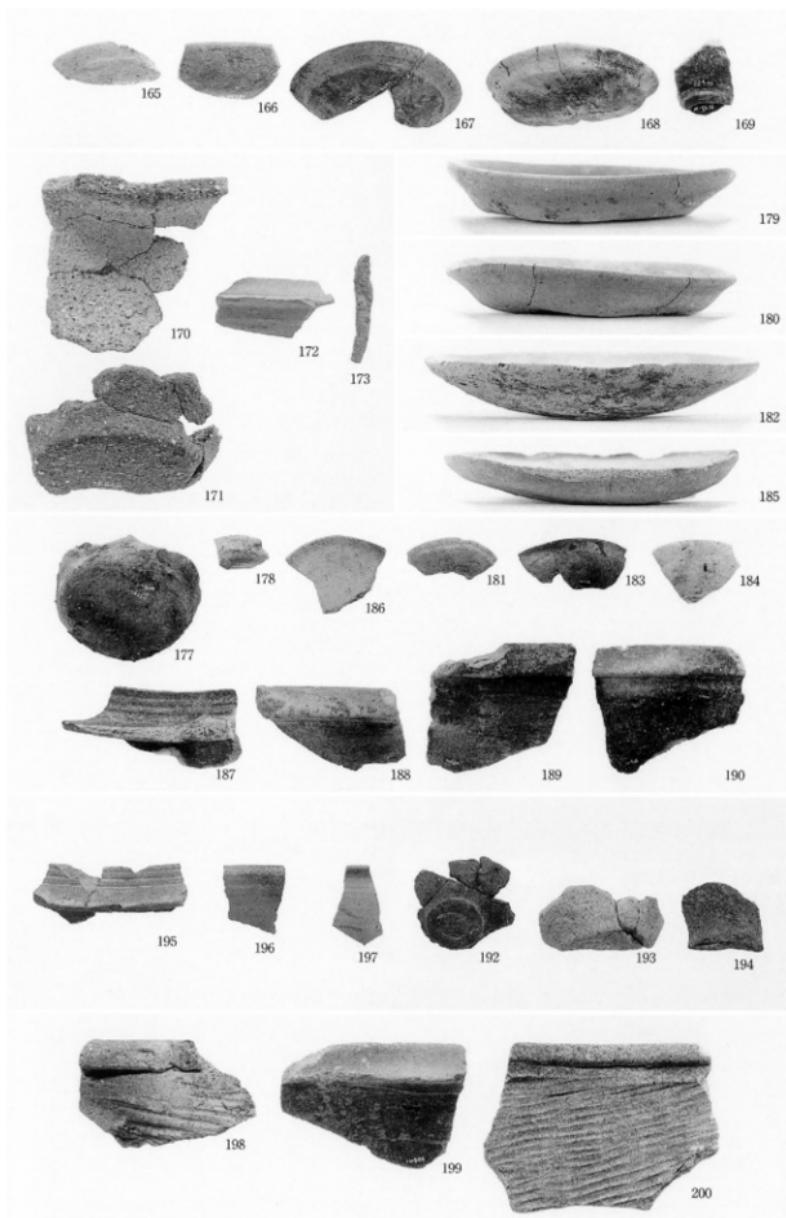


UHN93-1 SK 3 (64)、SK 7 (82・87・88~91・93・94・96~99)、SK 10 (100・101)



UHN 93-1 SK 15 (121~124・126)、SP 3 (133)、SP 5 (127~129)、SP 5 (131・132)、包含層
(142・146・148・150)

SEE 99-1 NV 1 (159)



SMZ 00-1 包含層 (165~169)

DNT 00-4 SD 1 (170·171)、SD 2 (172·173)、SK 1 (177·178·181~183·185·186·189·190)、

SK 2 (184·188)、SK 3 (179·180·187)、包含層 (192~197)

KGT 00-1 SF 1 (198)、包含層 (199·200)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	かわちながのしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	河内長野市埋蔵文化財調査報告書
副書名	上原北遺跡・昭栄町東遺跡・清水遺跡・大日寺遺跡・天野山金剛寺遺跡
巻次	四
シリーズ名	河内長野市文化財調査報告書
シリーズ番号	第33輯
編著者名	尾谷雅彦 烏羽正剛 太田宏明
編集機関	河内長野市教育委員会
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町396-3 TEL 0721-53-1111
発行年月日	2001年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡							
上原北遺跡 (00-1)	大阪府 河内長野市 上原町	27216	府114	34°	135°	2000.5.22	400m ²	店舗		
			河85	26'	33'	{				
				41"	34"	2000.6.12				
昭栄町東 遺跡	大阪府 河内長野市 昭栄町	27216	府140	34°	135°	2000.2.1	150m ²	複合文化 施設		
				27'	33'	{				
				04"	48"	2000.2.29				
清水遺跡	大阪府 河内長野市 岩瀬	27216	府35 河31	34°	135°	2000.4.11	31m ²	個人住宅		
大日寺遺跡	大阪府 河内長野市 喜多町	27216	府115 河86	24'	35'	{				
				43"	27"	2000.4.14				
				34°	135°	2000.8.18	350m ²	駐車場		
天野山金剛 寺遺跡	大阪府 河内長野市 天野町	27216	府16 河14	26'	34'	{				
				41"	21"	2000.9.25				
				34°	135°	2000.8.28	26m ²	個人住宅		
				24'	31'	{				
				42"	56"	2000.9.1				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上原北遺跡 (00-1)	集落	中世	掘建柱建物 溝・鋤溝 土坑・窯	土師質土器・瓦 質土器・須恵質 土器	木炭窯を検出
上原北遺跡 (93-1)	集落	中世	掘建柱建物 井戸・溝 土坑	土師質土器・瓦 質土器・須恵質 土器	
昭栄町東 遺跡	散布地	縄文・中世	土坑 落ち込み	石器・土師質土 器・瓦質土器	
清水遺跡	散布地	中世	溝・土坑	土師質土器・瓦 器・瓦質土器	
大日寺遺跡	社寺 古墳 墳墓	弥生～近世	溝・鋤溝 土坑	弥生土器土師質 土器・須恵器・ 瓦質土器	
天野山金剛 寺遺跡	社寺	中世	溝・道	瓦質土器 須恵質土器	

河内長野市文化財調査報告書第33輯
河内長野市埋蔵文化財調査報告書XII

2001年3月31日発行

発 行 大阪府河内長野市原町396-3

河内長野市教育委員会

0721-53-1111

印 刷 株中島弘文堂印刷所
